

那霸市内遺跡VIII

—首里旧金城村跡—

2019（平成31）年3月

那霸市

なはしないいせき
那覇市内遺跡VIII

しゅりきゅうかなんぐしくむらあと
—首里旧金城村跡—

序

本書は、市内遺跡発掘調査等として国の補助を受けて 2010（平成 22）年度に実施した「首里旧金城村跡」の緊急発掘調査の成果報告です。

「首里旧金城村跡」は、首里城が所在する台地の南斜面に位置し、18 世紀初頭に描かれた『首里古地図』の「金城村」と「内金城村」を遺跡の範囲としています。

今回の調査区である「内金城村」には、国指定天然記念物の「首里金城の大アカギ」や那覇市指定有形民俗文化財の「内金城御嶽」が所在します。内金城御嶽は大嶽と小嶽の二つに分かれ、それぞれに神名が伝わっており、沖縄の年中行事のひとつで、旧暦 12 月 8 日に行われる鬼餅節（ムーチー）の由来がある御嶽もあります。また、調査区周辺は、「高あむしられ」の記載が見て取れ、戦前の民俗地図では「畑」として表されています。

今回の調査成果としては、ピット、溝状遺構、耕作痕、礫集中遺構などの遺構が確認されています。確認された遺構で注目されたのは、生産遺跡に伴う耕具痕と考えられるもので、ピットや溝状遺構、礫集中遺構は、それに付随する可能性が示唆されます。

出土遺物としては、中国産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、円盤状製品、玉類、簪・錢貨など、多種多様な遺物が出土しています。

今後、周辺の調査成果を整理し、詳細な考察を進めることで、琉球王国時代における沖縄近世期の村跡の一端が明らかになると期待しています。

本報告書が、市民の皆様はもとより多くの方々に活用され、文化財保護行政の一助となれば幸いです。

末尾になりましたが、発掘調査作業ならびに、本報告書を作成するにあたってご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

2019（平成 31）年 3 月

那覇市長 城間 幹子

例　言

1. 本報告書は、国（文化庁）の補助を受けて、那覇市が 2010（平成 22）年度に実施した「首里旧金城村跡緊急発掘調査」の成果を収録したものである。
2. 発掘調査は、個人住宅建築に伴うもので、地権者及び建築施工業者に多大な協力を得た。
3. 発掘調査及び資料整理・報告書作成では、下記の方々に協力・指導を得た。記して感謝申し上げる。
 - ・首里金城町自治会
 - ・松竹重機
 - ・城間千栄子（元那覇市非常勤職員）
 - ・泉谷豊（元那覇市非常勤職員）
4. 図版 1 の空中写真（2009 年撮影）、第 1 図の那覇市全図（S = 1 : 50,000 平成 19 年 12 月 1 日発行）、第 2 図の那覇市全図（S = 1 : 25,000 平成 21 年 11 月 1 日発行）、第 3 図の 1 万分の 1 地形図 那覇（S = 1 : 10,000 平成 17 年 4 月 1 日発行）は、国土地理院発行のものを複製して使用した。
5. 第 1 図に使用した広域図は、『ブリタニカ国際地図』 株式会社 ティビーエス・ブリタニカ 1991 年 7 月 1 日（第 2 版改訂発行）の 91 ページの部分をトレースして使用した。
6. 第 4 図は、「都市計画図 1 : 2,500 平成 7 年 12 月修正 那覇市作成」を複写、加筆して使用した。
7. 第 5 図は、「那覇市現況・地籍併合図 縮尺 1 : 500 昭和 63 年 12 月 那覇市税務部資産税課」を複写、加筆して使用した。
8. 第 6 図は、「旧首里の歴史・民俗地図」 那覇市史編集室 1978 年 12 月 縮尺 1 : 8,500 の一部（那覇市歴史博物館所蔵）を拡大、複写、加筆して使用した。
9. 第 7 図は、「戦前の金城町民俗地図（昭和 4 ～ 10 年頃）」縮尺 1 / 1800 1976. 10. 17 作成（那覇市歴史博物館所蔵）の部分を複写して使用した。
10. 第 8・9 図は、沖縄県立図書館所蔵の「首里古地図」を部分的に複写して使用した。

11. 第10図は、『琉球国絵図史料集 第三集 一天保国絵図・首里古地図及び関連史料一』 沖縄県教育委員会 平成六年三月 P125 「20 内金城村」を複製・トレースして使用した。
12. 本報告書の図及び表に記した座標値は、世界測地系（第XV系）を基本とした。なお、第4・5図には、日本測地系（第XV系）を併記した。
13. 本報告書の編集・執筆は、請盛智秋・真栄城和美・山下真利子・加納立巳・樋口麻子・島弘の協力を得て、仲宗根が行った。
14. 掲図番号と写真図版の番号は一致するように配置してある。
15. 出土遺物は那覇市 市民文化部 文化財課で保管している。

目次

序

例言

第I章 調査に至る経緯	1
第II章 遺跡の位置と環境	4
第III章 調査経過と調査組織	14
第1節 調査経過	14
第2節 調査組織	16
第IV章 層序	19
第V章 遺構	20
1. ピット	
2. 溝状遺構	
3. 耕具痕	
4. 磨集中遺構	
第VI章 遺物	30
第1節 中国産青花	30
第2節 本土産陶磁器	31
第3節 沖縄産陶器	34
1. 施釉陶器	34
2. 無釉陶器	34
3. 陶質土器	35
4. 瓦質土器	35
第4節 円盤状製品	37
第5節 玉類	37
第6節 金属製品	37
第VII章 まとめ	51

報告書抄録

挿図目次

第1図 那覇市の位置と遺跡の位置	2	第9表 沖縄産無釉陶器・陶質土器・ 瓦質土器観察一覧	36
第2図 本遺跡と那覇市内の主な村跡	3	第10表 円盤状製品計測一覧	38
第3図 遺跡周辺の地形	7	第11表 円盤状製品観察一覧	39
第4図 首里旧金城村跡周辺の調査区	8	第12表 円盤状製品素材別出土一覧	40
第5図 調査区周辺の地形	9	第13表 玉類・金属製品観察一覧	41
第6図 調査区周辺の歴史・民俗地図 (首里地区)	10	第14表 錢貨計測一覧	41
第7図 戰前の金城町民俗地図	11		
第8図 首里古地図(部分)	12		
第9図 首里古地図(部分拡大)	12		
第10図 内金城村(首里古地図)	13	図版1 遺跡一帯の空中写真	
第11図 遺跡の層序	21	図版2 調査区の遠景と近隣 (首里金城町石疊道)の状況	
第12図 調査区平面図	23	図版3 表土剥ぎ作業の状況	
第13図 円盤状製品素材別出土状況	40	図版4 調査状況と調査区全景	
第14図 中国産青花	42	図版5 図面作成作業状況	
第15図 本土産磁器・染付・白磁	43	図版6 K-9・10グリッド	
第16図 本土産陶器	44	図版7 K-11グリッド	
第17図 沖縄産施釉陶器	45	図版8 L-9・10グリッド	
第18図 沖縄産無釉陶器①	46	図版9 L-11グリッド	
第19図 沖縄産無釉陶器②・陶質土器	47	図版10 中国産青花	
第20図 瓦質土器	48	図版11 本土産磁器・染付・白磁	
第21図 円盤状製品	49	図版12 本土産陶器	
第22図 玉類 金属製品	50	図版13 沖縄産施釉陶器	

挿表目次

第1表 調査工程	14	瓦質土器	
第2表 ドット遺物一覧	25	図版16 円盤状製品	
第3表 ピット計測一覧	27	図版17 玉類 金属製品	
第4表 遺物出土一覧	29		
第5表 中国産青花観察一覧	30		
第6表 本土産磁器 染付・白磁観察一覧	32		
第7表 本土産陶器観察一覧	33		
第8表 沖縄産施釉陶器観察一覧	35		

図版目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯

今回の調査は、那覇市首里金城町3丁目地内における個人住宅建築に伴って実施されたものである。那覇市が国（文化庁）の補助を受けて、2010年度（平成22年度）に記録保存のための発掘調査を実施した。

本調査地区は、平成22年1月19日付け、那覇市教育委員会教育長あて「埋蔵文化財事前審査願」が提出されたことが調査の契機であった。

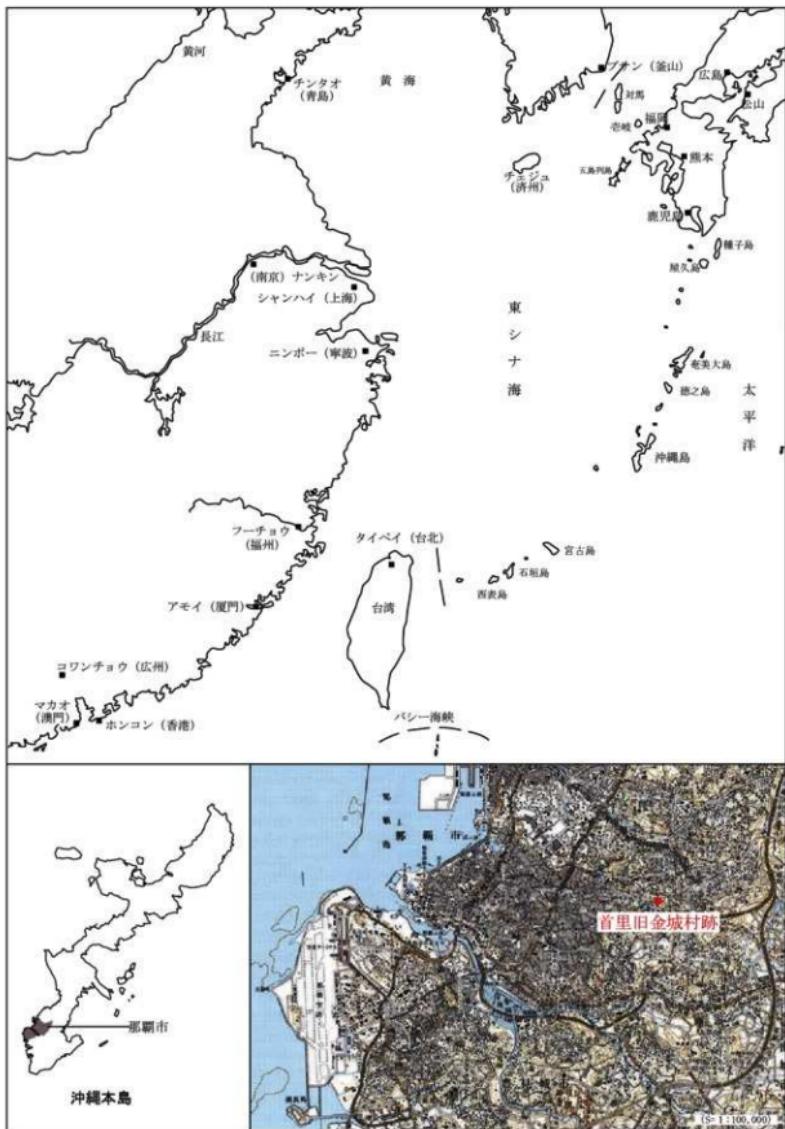
「埋蔵文化財事前審査願」の提出に伴い、同地域が「首里古地図」などに描かれた集落にあたり、またその周辺においても、幾つかの発掘調査事例があつたことなどを踏まえ、平成22年3月19日～3月29日までの期間で試掘調査が那覇市教育委員会文化財課にて実施された。

試掘調査（申請敷地内の5地点）の結果、遺物包含層（黒色土）の堆積が確認され、地山上（赤土：島尻マージ）には、ピット状の遺構を確認、さらに近世期の遺物が若干得られたことから平成22年4月1日付け、那覇市教育委員会教育長より地権者あてに、「遺跡あり」（申請地内には、埋蔵文化財が包蔵されていますので、保存のための調整が必要です。）と回答された（平成22年4月1日付け 埋蔵文化財事前審査報告書）。

その後、遺跡の取り扱いについて、那覇市教育委員会文化財課と、地権者及び建築設計・施工業者等との間で調整が行われた。調整の中で、建築工事の基礎の深さは約70cm（地山直上程度）、梁部分の掘削は控えたい等の意見が出された。その結果、遺跡の一部（地山確認遺構）の保存は可能であるが、同地に堆積する遺物包含層の保存は困難な状況となった。そのため、記録保存の処置を講じるための本発掘調査を実施する結論に至った（平成22年4月12日～4月23日）。

なお、文化財保護法の手続きは下記のとおりである。

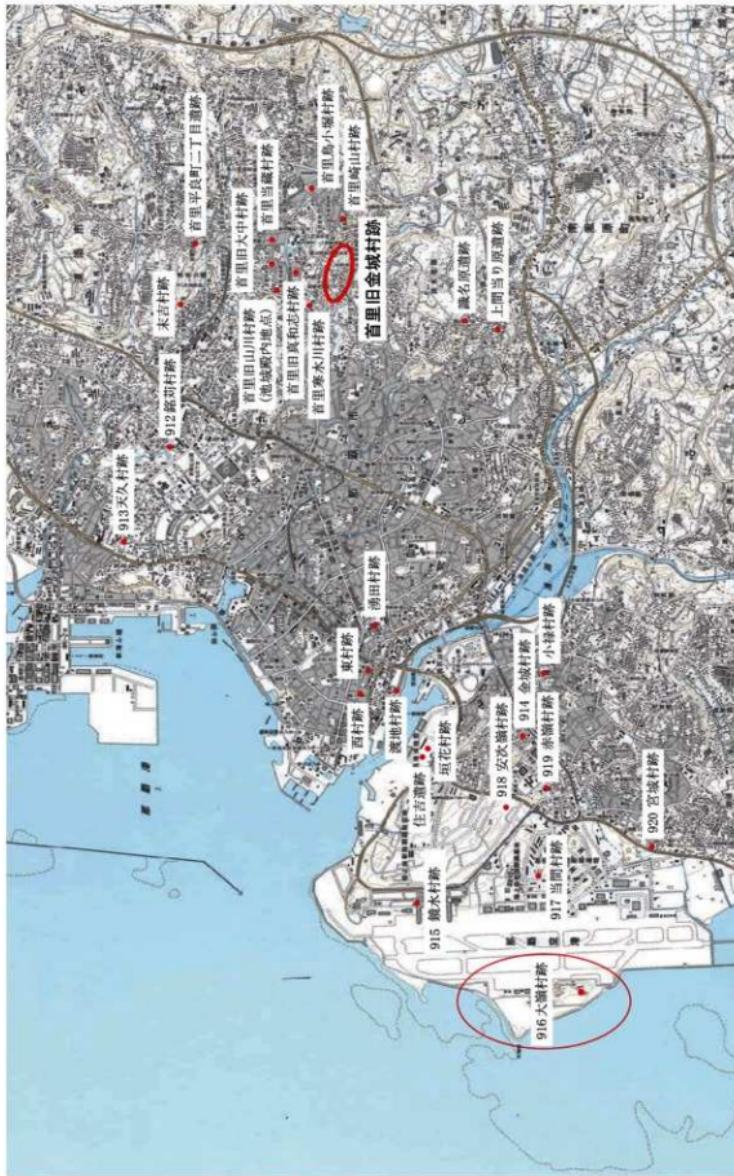
- ・平成22年4月2日付け、地権者より
「埋蔵文化財発掘の通知」について（文化財保護法第93条第1項）
- ・平成22年4月5日付け、市教育長より県教育庁あて進達
「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」
- ・平成22年4月6日付け、県教育庁から地権者・市教育長あて
「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」
「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（回答）」
- ・平成22年4月9日付け、市教育長から地権者あて
「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（送付）」
「発掘調査承諾書について（依頼）」
- ・平成22年4月9日付け、地権者から市教育長あて
「発掘調査承諾書」
- ・平成22年4月13日付け、市教育長から県教育長あて
「埋蔵文化財発掘調査について（着手報告）」



第1図 那覇市の位置と遺跡の位置

(S=1:5,000)

第2図 本遺跡と那覇市内の主な柱跡



- 平成 22 年 4 月 28 日付け、市文化財課長から県文化課長あて
「埋蔵文化財発掘調査の終了について（報告）」
- 平成 22 年 4 月 28 日付け、市教育長から那覇警察署長・県教育長あて
「埋蔵文化財発見届について」
「埋蔵文化財保管証の提出について」

【参考文献】

『首里古地図』 沖縄県立図書館 所蔵

『開発調整マップ』 那覇市教育委員会 文化財分布図（1998 年 3 月版）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

「首里旧金城村跡」は、沖縄県那覇市首里金城町 2・3 丁目付近を遺跡の範囲としている。

那覇市の位置について那覇市のホームページによると、「沖縄県は、北緯 24~28 度、東経 122~133 度の南北約 400 km、東西約 1,000 km の海上に弧を描いて連なる 160 の島しょの内、有人島 39 からなっています。その中で那覇市は最大の島、沖縄本島南部に位置します。また、本市は鹿児島と台北のほとんどの間にあり、那覇を中心とする 1,500 km の円周域には、東京、ビヨンヤン、香港、ソウル、北京、マニラなどの主要な都市があり、交通通信機能の上からも東南アジアの各都市を結ぶ要衝の地点であり、わが国の南の玄関として地理的に好条件の位置にあります。」と紹介されている（第 1 図）。

市域は、東西 10 km、南北 8 km の面積 39.57 km²（推計）を測り、北側に浦添市、東側に西原町、南東側に南風原町、南側に豊見城市が接している。人口は、322,578 人（2018（平成 30）年 10 月末現在）である。

地形は、旧市内を中心とする中央部において、ほぼ平坦面をなし、北側に天久台地、東側に首里台地、南東側に識名台地、南側に小禄台地等の丘陵・台地地帯がその周辺を取り囲む。その丘陵・台地地帯を源流とする河川が市内を東から流れ東シナ海に注ぐ。市の北側から安謝川、安里川、国場川が西流し、その間に、久茂地川やガーブ川などが流れる。

地質は、島尻層（第三紀中新世）、琉球石灰岩（第三紀新世から第四紀洪積世）、沖積層などの堆積が見られる。その分布状況は、旧市街地及び首里から天久、安謝における一帯、並びに識名方面で琉球石灰岩が露頭し、その他の地域の地表面は島尻層からなっている。旧市内の低地では、海浜堆積物が見られる。

市内の主な村跡を『那覇市歴史地図』・『開発調整マップ』、各発掘調査報告書、現地説明会資料などを参考に第 2 図に示した。多数所在する村跡の中で、首里旧金城村跡は、那覇市において壺屋地域に続く早期から、個人住宅建築等に伴う発掘調査が実施された地域である。

さて、「首里旧金城村跡」は、那覇市の中央東側に位置する。標高約 91.1m から 19.6m にかけての崖地形に位置し、首里台地の南斜面に所在する。「首里城」が所在する首里台地と識名台地の間には、国指定史跡・名勝の「弁之御獄」を源流とする安里川（金城川）が西流する。首里城（守礼門）から金城橋が架かる道筋には、琉球王府時代の主要道路である真珠道（=首里金城町石疊道：沖縄県指定

史跡・名勝)が南北に走る(第3・4図)。首里城から那覇港(屋良座森グスク)へと続く「真珠道」について、真玉道の建設及び真玉橋架設の由来を記した『真珠湊碑文(1522(尚真46)年)』によると、(ま玉ミなどの、ミちつくり、はしわたし申候時のひのもん)と記されている。首里城守礼門を起点として、金城・識名を経て真玉湊(那覇港)に至る石畳道で、国王頌徳碑(石門之東之碑文)には、この道路及び橋は、一般の交通の利便に供するほか、国土防衛のため王命により建設されたものと記されている(『沖縄大百科事典』)。

また、本遺跡周辺は、不透水層である島尻層(クチャ)に琉球石灰岩が不整合で堆積していることから、その間層から水が湧き出す。このことから遺跡周辺には、多くの湧泉が所在する水資源が豊かな地域でもある。本遺跡の所在地は、上述のとおり、首里金城町3丁目地内の住宅地にある(第4・5図)。首里旧金城村跡周辺の史跡・歴史的名地、戦前の金城町民俗地図を第6・7図に示す。参考頂きたい。

本調査区は、18世紀初頭に作成されたと考えられる『首里古地図』によれば、「内金城村」として描かれている(第8・9・10図)。同村は、屋敷(名)や寺院(大日寺・大慈院)の他に御嶽(内金城御嶽)が描かれ、今回の調査区には、「高あむしられ」の文字が表記されている。

内金城御嶽は、琉球王府時代から拝所として重要な役割を担っていたとされる。大嶽と小嶽の二つに分かれ、神名は大嶽が「カネノ御イベ」、小嶽は「イベヅカサ御セジ」とされる(『琉球國由來記』)。かつては、真壁大阿母志良礼が仕えていたとされる。なお、小嶽は、旧暦12月8日の鬼餅節(ムーチー)の由来が伝わる(『那覇市の文化財』)。これらの御嶽及び拝殿、参道は、上記の「首里古地図」でも確認できる。

【参考文献】

「那覇市 位置・面積」 那覇市ホームページ

『平成30年度 那覇市の教育』 那覇市教育委員会 平成30年8月

『平成30年度 市政概要』 那覇市議会事務局 平成30年9月

『平成30年度版 那覇市の環境(平成29年度次報告)』 那覇市 環境部環境政策課 平成30年10月

『広報 なは 市民の友 第815号』 那覇市 2018年(平成30年)12月

『那覇市歴史地図－文化遺産皆査調査報告書－』 那覇市教育委員会文化課 1986年3月31日

『開発調整マップ』 那覇市教育委員会文化課 文化財分布図(1998年3月版)

那覇市文化財調査報告書 第45集 『安謝東原南遺跡 旧天久村古井戸遺跡』 那覇市教育委員会 2000年3月

平成30年度 末吉村跡発掘調査現地説明会(資料) 2018.11.10 那覇市文化財課

那覇市文化財調査報告書 第56集 『首里旧山川村跡(池城殿内地)』 那覇市教育委員会 2002年11月

那覇市文化財調査報告書 第104集 『首里当蔵旧水路』 那覇市 文化財課 2017(平成29)年2月

平成29年度 首里当蔵旧水路・首里城公園中城御殿跡 発掘調査現地説明会(資料)

沖縄県埋蔵文化財センター 平成29(2017)年12月23日(土)

那覇市文化財調査報告書 第68集 『首里旧真和志村跡(首里真和志村跡 首里旧金城村跡)』

那覇市教育委員会 2005年3月

那覇市文化財調査報告書 第46集 『首里旧金城村跡』 那覇市教育委員会 2000年3月

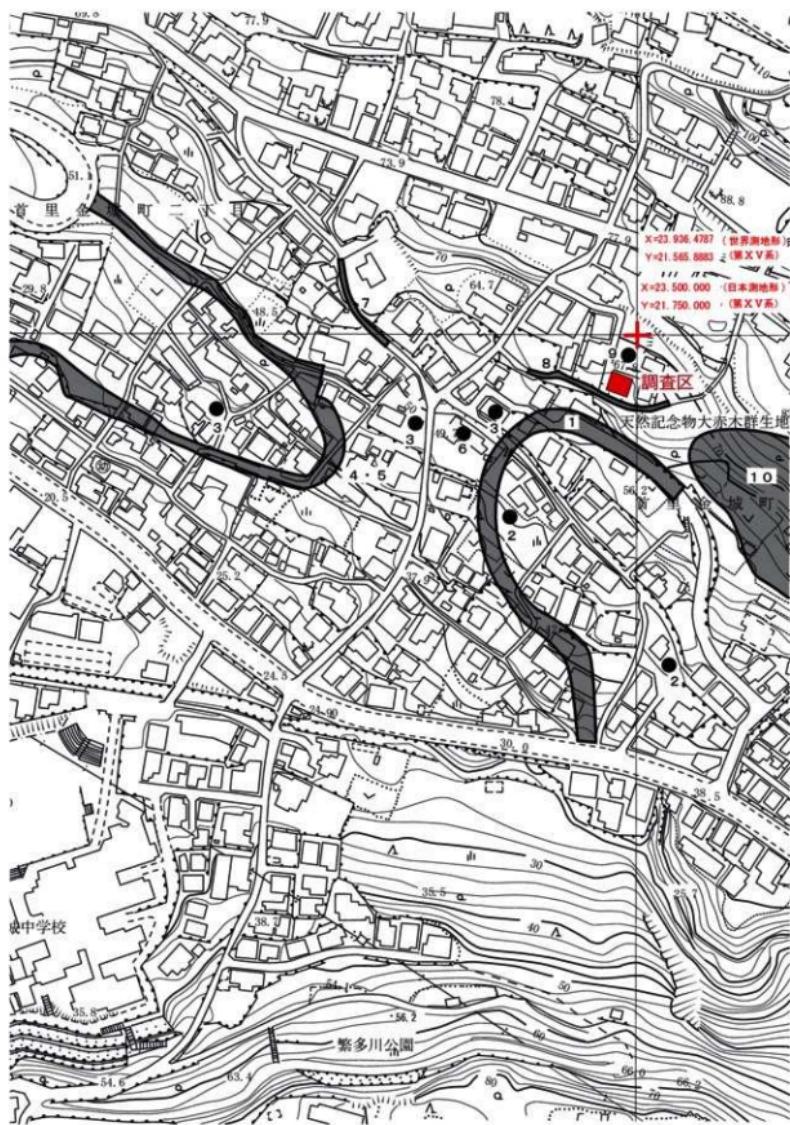
- 那覇市文化財調査報告書 第48集 『首里旧金城村跡』 那覇市教育委員会 2001年3月
『首里旧金城村跡』 那覇市教育委員会 2007年5月
- 那覇市文化財調査報告書 第81集 『首里旧金城村跡』 那覇市教育委員会 2010年2月
- 那覇市文化財調査報告書 第80集 『那覇市内遺跡II (首里金城村跡)』 那覇市教育委員会 2009年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第82集 『那覇市内遺跡III 一首里旧金城村跡一 一首里旧真和志村跡一』 那覇市教育委員会
2010年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第106集 『那覇市内遺跡VII 一首里旧金城村跡一 一御茶屋御殿一』 那覇市 2018年2月
- 那覇市文化財調査報告書 第49集 『識名原遺跡』 那覇市教育委員会 2001年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第74集 『那覇市内遺跡I (識名原遺跡 首里旧大中村跡)』 那覇市教育委員会 2007年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第86集 『那覇市内遺跡IV
- 豊屋古窯群 - 小禄村跡 - 識名原遺跡 - 伍徳院・万松院 -』 那覇市教育委員会 2011年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第102集 『那覇市内遺跡VI 一首里崎山村跡一』 那覇市 文化財課 2015年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第96集 『湯田村跡』 那覇市教育委員会 2013年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第99集 『東村跡』 那覇市 平成28(2016)年4月
- 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第92集 『東村跡』 沖縄県立埋蔵文化財センター 平成29(2017)年3月
- 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集 『渡地村跡』 沖縄県立埋蔵文化財センター 平成19(2007)年7月
- 那覇市文化財調査報告書 第91集 『渡地村跡』 那覇市教育委員会 平成24(2012)年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第71集 『住吉遺跡』 那覇市教育委員会 2006年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第78集 『垣花村跡』 那覇市教育委員会 2009年2月
- 那覇市文化財調査報告書 第88集 『垣花村跡』 那覇市教育委員会 2011年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第24集 『尻川原遺跡』 那覇市教育委員会 1993年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第97集 『小禄村跡』 那覇市 文化財課 2014(平成26)年2月
- 那覇市文化財調査報告書 第89集 『大瀬村跡』 那覇市教育委員会 2012(平成24)年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第92集 『那覇空港内大瀬地区 埋蔵文化財分布調査報告』
那覇市教育委員会 2012(平成24)年3月
- 那覇市文化財調査報告書 第107集 『那覇市大嶺海岸の石切場等跡』 那覇市 2018(平成30)年3月
大嶺村跡発掘調査 現地説明会(資料) 沖縄県立埋蔵文化財センター 平成28年6月16日

- 『沖縄大百科事典 下巻』 沖縄タイムス社 1983年5月30日発行
- 沖縄県文化財調査報告書第60集 『金石文 -歴史資料調査報告書V-』 沖縄県教育委員会 昭和60年3月31日
- 『那覇市の史跡・旧跡ガイドブック』 那覇市歴史博物館 編 2014(平成26)年3月15日
- 『旧首里的歴史・民俗地図』 縮尺1/8,500 1978年12月 那覇市歴史博物館 所蔵
- 『戦前の金城町民俗地図(昭和4~10年頃)』 縮尺1/1800 1976.10月 那覇市歴史博物館 所蔵
- 『首里古地図』 沖縄県立図書館 所蔵
- 『琉球国繪図史料集 第三集 一天保国繪図・首里古地図及び関連史料一』 沖縄県教育委員会 平成六年三月
- 『那覇市の文化財 平成18年度』 那覇市教育委員会 平成19年3月
- 『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』 角川日本地名大辞典編纂委員会 昭和61年7月8日
- 『日本歴史地名大系第四八巻 沖縄県の地名』 株式会社 平凡社 2002年12月10日



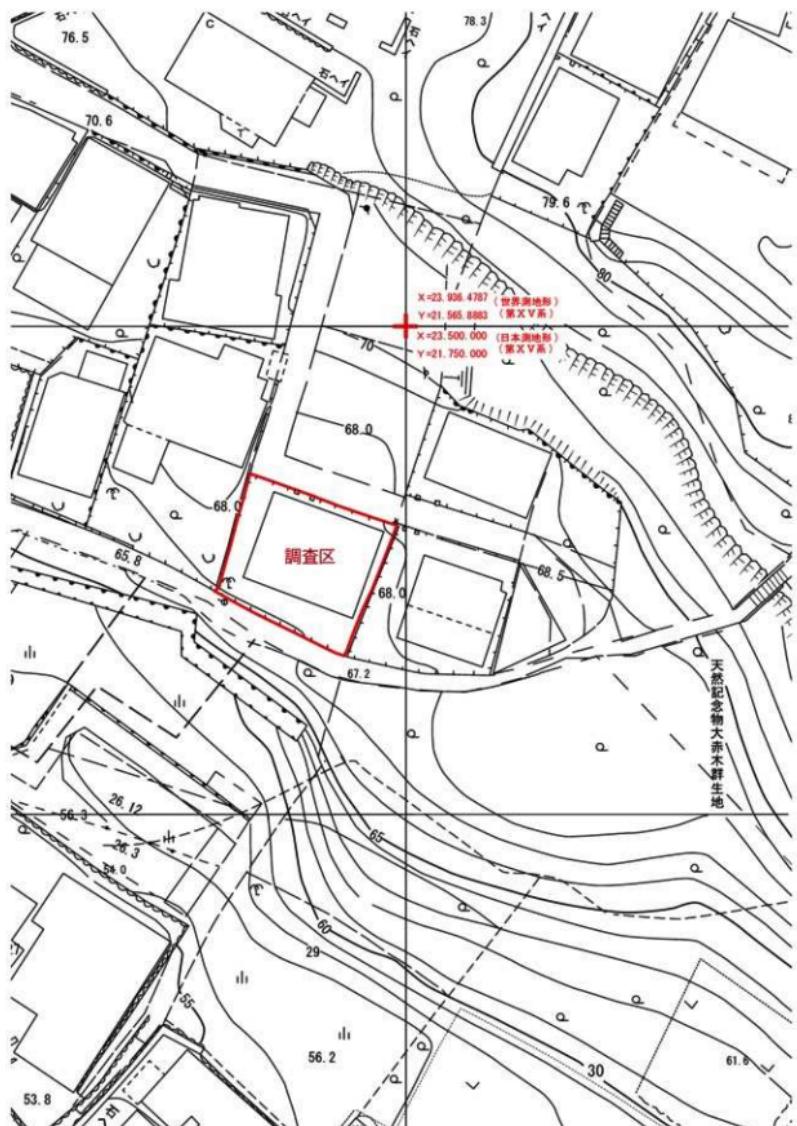
第3図 遺跡周辺の地形

(S=1:10,000)



第4図 首里旧金城村跡周辺の調査区（調査区の数字は第Ⅷ章参考文献の番号に対応）

(S=1:2,500)



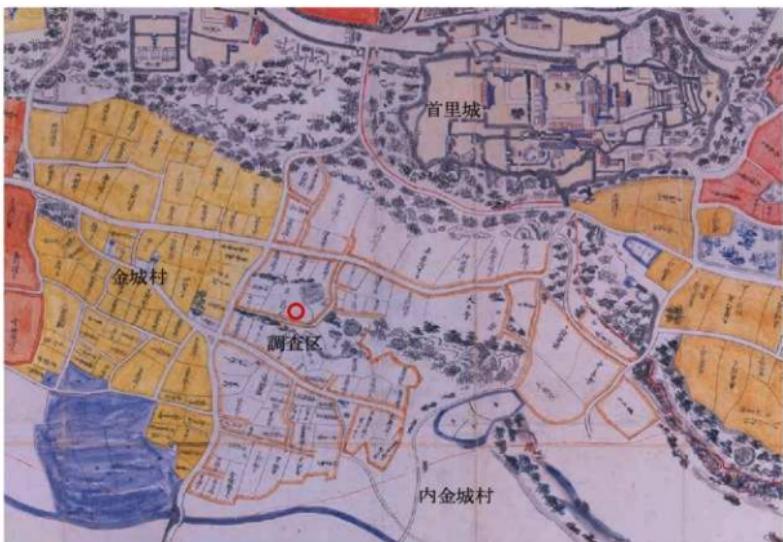
第5図 調査区周辺の地形



第6図 調査区周辺の歴史・民俗地図（首里地区）

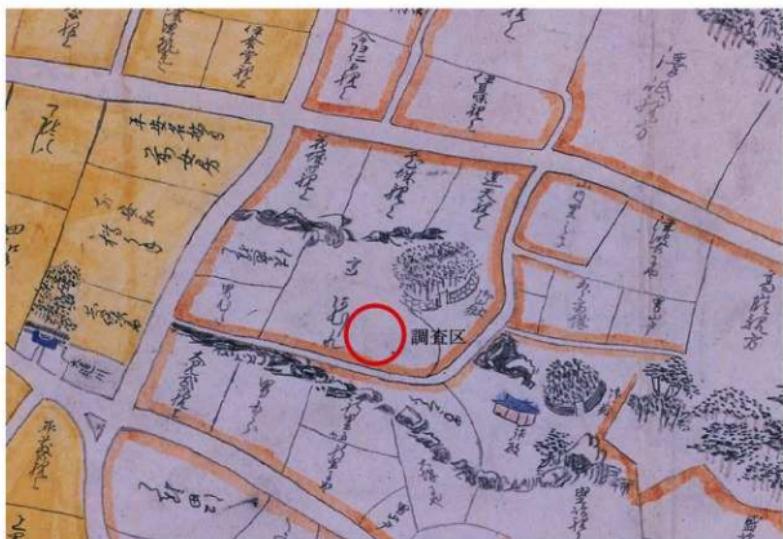


第7図 戦前の金城町民俗地図



第8図 首里古地图（部分）

(沖縄県立図書館所蔵)

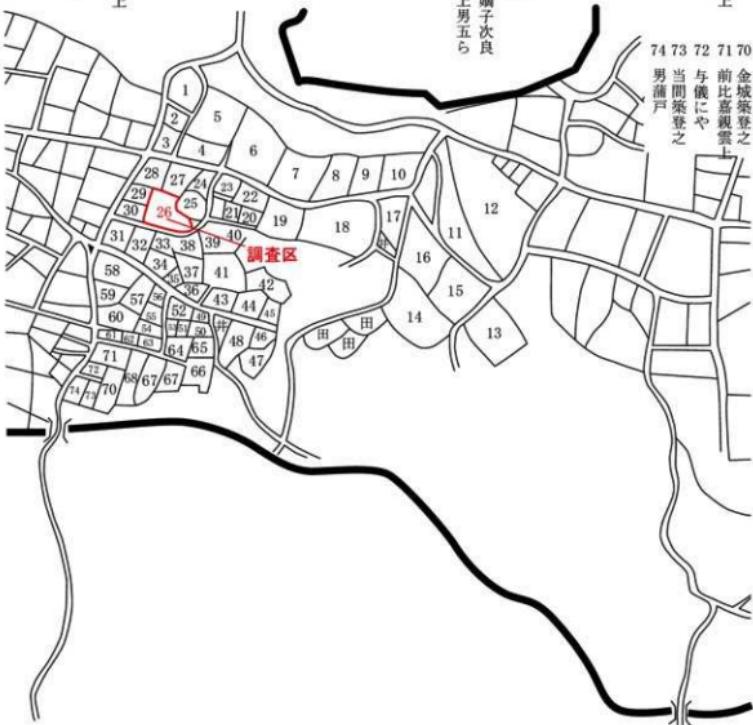


第9図 首里古地图（部分拡大）

(沖縄県立図書館所蔵)

内金城村
1 前安座間親雲上男加那
2 与那城築登之親雲上
3 大城にや
4 今帰仁之子親雲上
5 牧志築登之親雲上
6 沢祇親方
7 平安座里主
8 伊地親雲上
9 知念築登之親雲上
10 長堂築登之親雲上
11 前又吉親雲上
12 嶋山御嶽
13 男とく
14 大慈院
15 安里にや
16 池原親雲上
17 高安子
18 大日寺
19 高瀬親方
20 男山戸
21 五ら宮城
22 山内里之子
23 津波古にや
24 運天親雲上
25 花城親雲上
26 高あむしられ 花城親雲上
27 佐辺親雲上
28 男五ら 新里にや
29 大見武築登之親雲上
30 男波子 玉城親雲上
31 新里にや
32 佐波子
33 安富祖築登之親雲上
34 安里にや
35 金城築登之親雲上
36 御嶽
37 金城築登之親雲上
38 比屋根築登之
39 江田親雲上
40 男屋口
41 比嘉築登之
42 金城にや
43 古波藏子
44 古波藏子
45 当間築登之親雲上
46 前原築登之親雲上
47 西平築登之親雲上
48 前屋宜築登之親雲上
49 前比嘉親雲上
50 前比嘉親雲上
51 比嘉築登之
52 宮城按親雲上
53 比嘉築登之
54 比嘉築登之
55 比嘉築登之
56 比嘉築登之
57 比嘉築登之
58 比嘉築登之
59 比嘉築登之
60 比嘉築登之
61 比嘉築登之
62 比嘉築登之
63 比嘉築登之
64 比嘉築登之
65 比嘉築登之
66 比嘉築登之
67 比嘉築登之
68 比嘉築登之
69 比嘉築登之
70 比嘉築登之
71 比嘉築登之
72 比嘉築登之
73 比嘉築登之
74 比嘉築登之
75 比嘉築登之
76 比嘉築登之
77 比嘉築登之
78 比嘉築登之
79 比嘉築登之
80 比嘉築登之
81 比嘉築登之
82 比嘉築登之
83 比嘉築登之
84 比嘉築登之
85 比嘉築登之
86 比嘉築登之
87 比嘉築登之
88 比嘉築登之
89 比嘉築登之
90 比嘉築登之
91 比嘉築登之
92 比嘉築登之
93 比嘉築登之
94 比嘉築登之
95 比嘉築登之
96 比嘉築登之
97 比嘉築登之
98 比嘉築登之
99 比嘉築登之
100 比嘉築登之

男山戸
与那嶼築登之親雲上
大城にや
男三ら
拝殿
御嶽
盛島親方
吉瀬築登親雲上
当間築登之親雲上
古波藏子
古波藏子
前原築登之親雲上
新里にや
西平築登之親雲上嫡子次良
前屋宜築登之親雲上男五ら
前比嘉親雲上
与儀にや
當間築登之
男蒲戸



第10図 内金城村(首里古地图)

第Ⅲ章 調査経過と調査組織

第1節 調査経過

本調査は、第Ⅰ章でも述べたとおり、2010（平成22）年4月12日～2010（平成22）年4月23日の期間で実施された。なお、資料整理作業は、2014（平成26）年度から開始し、2017（平成29）年度まで断続的に行い、報告書作成作業は、2018（平成30）年度に実施した（第1表）。

調査では、地権者及び建築設計・施工業者、首里金城町自治会等からの多大な協力を得た。

さて、本遺跡の調査は、「首里旧金城村跡」における遺物包含層の掘削を主な目的とした。第Ⅰ章で述べたとおり、地表面で確認された遺構は、建築物の基礎の下に現状保存することができたため、いくつかのピットを半裁するのみの調査を計画した。

まず、発掘調査の事前準備として、バックホーによる表土剥ぎ作業について施工会社との調整・打ち合わせを平成22年4月7日（水）に行った。表土剥ぎ作業における注意事項を確認した後、建物梁部分以外に6つのグリッドを設け、施工業者の協力のもと、表土の掘削作業を行った。

人力による掘削作業は、平成22年4月12日（月）から開始した。

発掘調査は、敷地内に4m×4mの調査グリッドを設定した。調査グリッドは、北から南にアルファベット（K・L）、西から東に算用数字（9・10・11）を付した。その呼称は、北東の交点を基軸として「K-9、L-10・・・」とした。

第1表 調査工程

年度 工程\	2009年度 (平成21年度)	2010年度 (平成22年度)	2014年度～2017年度 (平成26年度～平成29年度)	2018年度 (平成30年度)
試掘調査	---	---	---	---
発掘調査	---	---	---	---
資料整理	---	---	---	---
報告書作成	---	---	---	---

以下、調査概要を業務日誌より略記する。

2010（平成22）年4月

12日（月）くもり

調査区の全体清掃を開始。現地調査（人力掘削作業）を開始する。

4m×4mのグリッドを設定した後、各グリッド（K-11、L-11、K-9・10）の掘り下げ作業を開始。出土遺物は青磁等も見られるものの小片が多数を占める。

13日（火）くもり

各グリッド掘り下げ作業。第①層の50cm程で、地山（赤土）が確認できそうな状況。

14日（水）くもり

各グリッド壁面の精査作業を行う。K・L-11 グリッドでは、地山面に溝状遺構やピット、鉄跡（耕作痕）などが確認できる。

15日（木）雨時々くもり

雨天のため、出土遺物の洗浄作業及び発掘調査用具の追加準備を行う。

16日（金）くもり時々小雨

L-9・10 グリッドの掘り下げ終了（第①層40/60）。K-9・10 グリッドで確認された疊集中部の精査作業を行う。各グリッド壁面の断面図作成。

19日（月）くもり

L-10 グリッドで確認されたピット（No.1～6）の半裁作業を実施。各グリッドの遺構平面図作成を開始する。

20日（火）小雨後くもり

各グリッド遺構確認面の精査作業を行う。遺構ラインの確認。各グリッド出土遺物のレベルングを行った後、取り上げ作業を実施。

21日（水）くもり後晴れ

遺構図面の確認及び写真撮影作業を行う。

22日（木）晴れ

各グリッド杭の測量作業（座標点設置のための測角・測距作業）を実施。K-9・10 グリッド確認遺構の写真撮影を行った後、調査区の埋戻し作業を開始する。

23日（金）くもり時々小雨

調査区内及び周辺の清掃作業及び発掘調査用具の整理を行う。本日にて発掘調査をすべて終了し、現地撤収を行った。

第2節 調査組織

本遺跡の調査組織は以下のとおりである。

(1) 調査組織（発掘調査：平成22年度）

事業主体	那覇市教育委員会	教 育 長	城間 幹子
事業所管	文化財課	課 長	古塚 達朗
調査総括	文化財課	副 參 事 島	弘
調査事務	文化財課	副 參 事 島	弘
	"	主 幹 内間	靖
	"	主任主事 仲宗根	健
	"	主 事 宮城	奈里（臨時職員）
調査担当	文化財課	副 參 事 島	弘
	"	主 幹 内間	靖
	"	専門員主査 玉城	安明
	"	" 北條	真子
	"	主任専門員 仲宗根	啓
	"	" 桶口	麻子
	"	" 當銘	由嗣
	"	専 門 員 知念	政樹
	"	臨時職員 上江洲	由昇（発掘調査作業員）
	"	" 猶長	しのぶ（ " ）
	"	" 仲西	美那子（ " ）
	"	" 宮良	知子（ " ）

(2) 調査組織 (資料整理 : 平成 26~30 年度)

事業主体	那覇市	市長	翁長	雄志 (平成 26 年度)
		市長	城間	幹子 (平成 26~30 年度)
	市民文化部	部長	島田	聰子 (平成 26・27 年度)
	"	部長	玉寄	隆雄 (平成 28 年度)
	"	部長	徳盛	仁 (平成 29・30 年度)
	"	副部長	玉寄	隆雄 (平成 26~27 年度)
	"	副部長	渡慶次	一司 (平成 28~30 年度)
事業所管	文化財課	課長	古塚	達朗 (平成 26・27 年度)
	"	課長	岸本	修 (平成 28・29 年度)
	"	課長	末吉	正睦 (平成 30 年度)
調査総括	文化財課	副参事	島	弘 (平成 26~29 年度)
	"	副参事	内間	靖 (平成 30 年度)
調査事務	文化財課	副参事	島	弘 (平成 26~29 年度)
	"	副参事	内間	靖 (平成 30 年度)
	"	主幹	内間	靖 (平成 26~29 年度)
	"	主査	新里	清美 (平成 26・27 年度)
	"	主査	神谷	あけみ (平成 28~30 年度)
	"	主任主事	瑞慶山由香里	（平成 26 年度）
	"	主任主事	高嶺	朝美 (平成 27~29 年度)
調査担当	文化財課 (埋文 G)	副参事	島	弘 (~29 年度)
	"	"	内間	靖 (平成 30 年度)
	"	専門員主査	仲宗根	啓
	"	"	樋口	麻子
	"	主任専門員	當銘	由嗣
	"	主任主事	島	弘
	"	主任学芸員	吉田	健太
	"	学芸員	天久	瑞香
	"	非常勤専門員	長濱	愛梨 (平成 26~28 年度)
	"	"	城間	千栄子 (平成 26 年度)
	"	"	玉城	真紀子 (平成 28 年度)
	"	"	牧村	美緒 (平成 28 年度)
	"	"	阿部	直子 (平成 29 年度)

〃 〃 高良 夏枝 (平成 29・30 年度)
〃 〃 名嘉山 美野 (平成 30 年度)
〃 (開調G) 主幹 玉城 安明
〃 主任学芸員 安斎 真知子
〃 学芸員 江上 輝
〃 非常勤専門員 徳元 剛 (平成 27~30 年度)
〃 〃 砂川 曜洸 (平成 29 年度)
〃 〃 渡辺 幸夫 (平成 29・30 年度)
〃 〃 山道 峻 (平成 30 年度)

非常勤職員（資料整理作業）

(平成 26 年度)

城間千栄子 真栄城和美 山下美也子 宮良知子

(平成 27 年度)

真栄城和美 請盛智秋 山下美也子 山下真利子 高良夏枝 新垣成子 加納立巳

(平成 28 年度)

真栄城和美 請盛智秋 山下真利子

(平成 29 年度)

請盛智秋

第IV章 層序

今回の調査の層序は、大きく四枚に大別した（第11図）。最上部は、表土層。次に第①層上部。その下層に第①層。最下層は地山（赤土：島尻マージ）。

暗褐色及び一部黒色を呈する第①層を遺跡の遺物包含層とした。

第①層は、厚20cm程度で出土遺物は中国産青花から本土産近代磁器までが層序内で一括して得られる状況であった。

一部出土遺物については、その出土状況を座標値（平板実測図から図上計算）及び標高を記録して取り上げた（第12図 第2表）参照。

なお、色調は土色帖を参考に観察した。以下に、層序の概略を記す。

表土層

既存建物による擾乱が見られる。暗褐色（10暗褐 YR3/3）を呈する。層厚は20~40cm。

第①層上部

表層と第①層の間層。暗褐色（10暗褐 YR3/4）を呈する。層厚は約10cm前後。

第①層

遺物包含層。全体としては、暗褐色（10YR 暗褐 3/3）を呈する層相であった。一部に黒色（7.5YR 黑 2/1）を呈する土層も確認できた。中国産・本土産陶磁器や沖縄産陶器・近代磁器などを含む。しまりには若干欠ける。層厚は約20cm前後。

地山層

赤土（島尻マージ）。上部で明褐色（7.5KR 明褐 5/8 地山①）を呈する移行層が見られた。全体としては、黄褐色（7.5YR 黄褐 7/8 地山②）や橙色（7.5YR 橙 6/8・2.5YR 橙 6/8 地山③）など幾つかの色調が観察された。

第V章 遺構

今回の調査で確認された遺構は、ピット・溝状遺構・耕具痕（鋸跡・耕作痕）・礫集中遺構であつた。（第12図 図版6～9）。

標高約67mの地山直上付近で遺構が確認されている。調査区の北東側（標高約67.3m）から南西側（標高約67.0m）にかけて若干の傾斜を持つ。

各遺構の特徴等を以下に略記する。

1. ピット

K-10 グリッドで6基、L-9グリッドで1基、L-10 グリッドで6基、L-11 グリッドで1基のピットを半裁した。

平面形は、主に円形あるいは梢円形を呈するものが多くを占める。大きさは、直径 20 cm弱から 50 cm弱までのものがある。深さは、50 cmを超るものから 10 cm未満のものまで多様である。

出土遺物は、沖縄産陶器が多数を占めるほか、中国産青磁・青花等も得られている。また各ピット内の覆土をサンプリングしている。

ピットの計測一覧を第3表に示した。参照されたい。

2. 溝状遺構

L-11・10・9グリッドにおいて、東西に延びる溝状遺構を確認した。遺構確認面での観察では、調査区の地形と同様に東側から西側へ若干の傾斜をもつようである。また、調査区南西側（L-9・10 グリッド）で、南側に折れる状況を呈していた。限られた調査範囲であったため判然としないものの、南側の崖地に延びる様相が想起される。

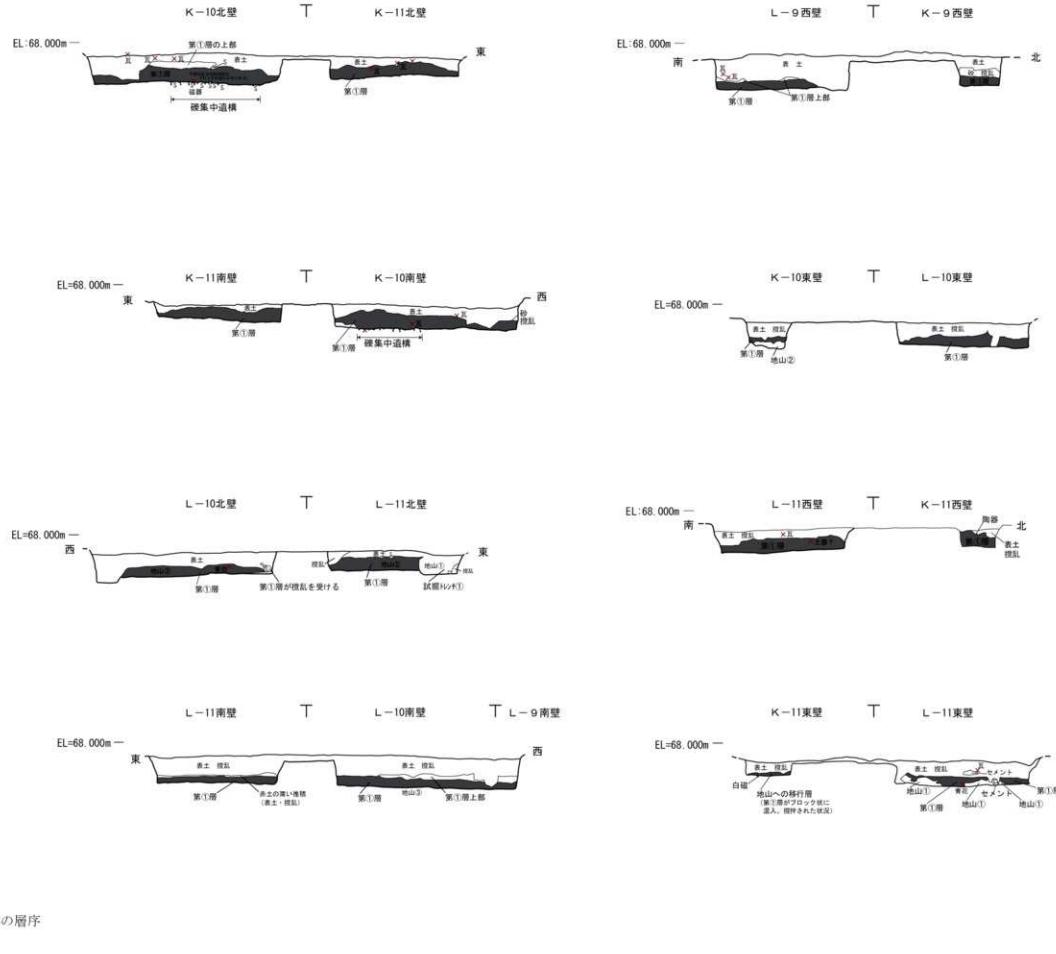
3. 耕具痕（鋸跡・耕作痕）

調査区全体に、耕具痕（鋸跡・耕作痕）と考えられる遺構が確認された。平面形が略三角形となるものが代表的なものである。また、不定形なピット状になるものなかにも、シャープなラインが見られるものがあることから、鋸跡（耕作痕）を想起させた。L-11 グリッドの溝状遺構の周辺においては、特にその確認事例が顕著であった（図版9）。

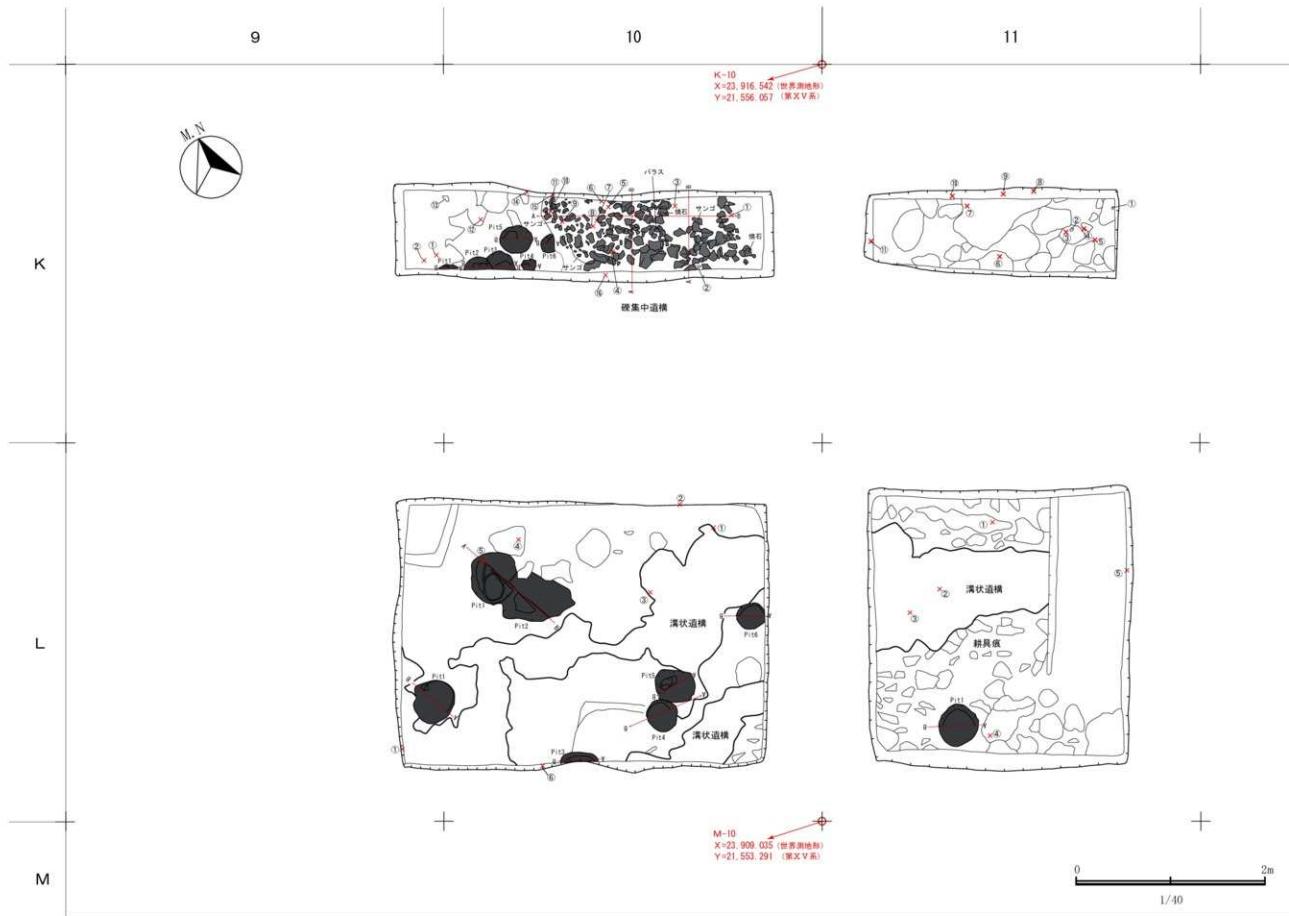
4. 磯集中遺構

K-10 グリッドにおいて確認された。長さ約 2.3m、幅約 0.8m、深さ約 40 cm程に掘り込まれ、主に琉球石灰岩礫を充填している。遺構確認面では、特別な平面形を把握することは、できなかつたことから、用途は不明である。水捌けのための施設、あるいは、廃棄物貯蔵施設（シリ）等も検討したが、判然としない。

同遺構の東側を半裁した。出土遺物としては、沖縄産施釉陶器、無釉陶器が多数を占める。特に、沖縄産無釉陶器は大型の資料が目に付いた。



第11図 遺跡の層序



第12図 調査区平面図

第2表 ドット遺物一覧

グリッド	遺物No	点上No	補助番号 同様番号	種類	器種	部位	点数	X	Y	Z	中国産青花	中国産青磁	中国産 黒釉陶器	本土産白陶	本土産染付	片岡窯 白釉陶器	片岡窯 黒釉陶器	片岡窯 青花土器	瓦	円盤状製品	土器	土製品	土地	鉄製品	合計
K-9	①	K-9-①		瓦	赤瓦	不明	1	23,916,045	21,551,547	67.110									1					1	
K-9	②	K-9-②		土製品	羽口	不明	1	23,916,045	21,551,307	67.093										1					1
K-10	①	K-10-①		鉄製品	刀物	刀部	1	23,915,385	21,554,607	67.058															1
K-10	②	K-10-②	第15図 図版11の2	沖溝底無釉陶器	蓋	胴部	1	23,914,985	21,554,097	67.089						1									1
K-10	③	K-10-③		土塊	不明	不明	1	23,915,685	21,554,097	67.089														1	
K-10	④	K-10-④		沖溝底無釉陶器	鉢	胴部	1	23,915,465	21,553,317	67.106														1	
K-10	⑤	K-10-⑤	第15図 図版11の3	木造土器	小碗	口縁～底部	1	23,915,905	21,553,427	67.135					1									1	
K-10	⑥	K-10-⑥		沖溝底無釉陶器	水注	胴部	1	23,915,985	21,553,367	67.140					1								1		
K-10	⑦	K-10-⑦		木土產器	碗	口縁部	1	23,915,805	21,553,247	67.122					1								1		
K-10	⑧	K-10-⑧		沖溝底無釉陶器	鉢	底部	1	23,915,765	21,553,187	67.131													1		
K-10	⑨	K-10-⑨		瓦	灰色：平瓦	胴部	1	23,915,925	21,552,907	67.123													1		
K-10	⑩	K-10-⑩		沖溝底無釉陶器	不明	不明	1	23,916,125	21,552,897	67.120													1		
K-10	⑪	K-10-⑪		瓦	灰色：平瓦	胴部	1	23,916,075	21,552,827	67.091													1		
K-10	⑫	K-10-⑫		沖溝底陶質土器	不明	不明	1	23,916,285	21,552,147	67.144													1		
K-10	⑬	K-10-⑬		中國産黒釉陶器	蓋	胴部	1	23,916,585	21,551,837	67.103					1								1		
K-10	⑭	K-10-⑭		沖溝底陶質土器	蓋	機内部	1	23,916,335	21,552,897	67.542					1								1		
K-10	⑮	K-10-⑮		瓦	不明	不明	1	23,916,275	21,552,787	67.453													1		
K-10	⑯	K-10-⑯		沖溝底無釉陶器	不明	不明	1	23,915,235	21,553,137	67.192													1		
K-11	①	K-11-①		本土產染付	不明	胴部	1	23,914,055	21,558,457	67.325					1								1		
K-11	②	K-11-②		瓦	不明	胴部	1	23,914,015	21,557,987	67.302													1		
K-11	③	K-11-③		瓦	不明	胴部	1	23,913,995	21,557,887	67.302													1		
K-11	④	K-11-④		土器	不明	不明	1	23,913,955	21,558,107	67.298													1		
K-11	⑤	K-11-⑤	第21図 図版16の13	沖溝底陶質土器 中國産黒釉陶器	不明	胴部	2	21,913,815	21,558,157	67.301					1	1							2		
K-11	⑥	K-11-⑥		土塊	不明	不明	1	23,914,005	21,557,137	67.299													1		
K-11	⑦	K-11-⑦		土器	不明	不明	1	23,914,615	21,557,017	67.281													1		
K-11	⑧	K-11-⑧		本土產染付	碗	底部	1	23,914,525	21,557,717	67.534					1								1		
K-11	⑨	K-11-⑨		沖溝底無釉陶器	瓦	不明：平	胴部	2	23,914,595	21,557,427	67.466												2		
K-11	⑩	K-11-⑩	第21図 図版16の13	円盤状製品	瓦	完形	1	23,914,785	21,556,907	67.341													1		
K-11	⑪	K-11-⑪		沖溝底無釉陶器	火炉	口縁部	1	23,914,615	21,555,917	67.508													1		
L-9	①	L-9-①		瓦	赤瓦：丸	端部	1	23,911,385	21,549,417	67.206													1		
L-10	①	L-10-①		土器	不明	胴部	1	23,912,435	21,555,327	67.124													1		
L-10	②	L-10-②		中国産青花	碗	口縁部	1	23,912,785	21,553,075	67.357	1												1		
L-10	③	L-10-③		瓦	平	胴部	1	23,912,025	21,552,447	67.110													1		
L-10	④	L-10-④		中国産青磁	不明	胴部	1	23,913,035	21,551,337	67.072	1												1		
L-10	⑤	L-10-⑤	第21図 図版16の13	沖溝底陶質器 沖溝底陶器	瓦	不明：平	口縁部	3	23,912,955	21,556,917	67.061												3		
L-10	⑥	L-10-⑥		瓦	平	胴部	1	23,910,765	21,556,767	67.212													1		
L-11	①	L-11-①		欠番																			0		
L-11	②	L-11-②		瓦	赤瓦：平	胴部	1	23,910,905	21,555,307	67.174													1		
L-11	③	L-11-③		沖溝底無釉陶器	不明	胴部	1	23,910,775	21,554,927	67.149													1		
L-11	④	L-11-④		沖溝底無釉陶器	不明	胴部	1	23,909,265	21,555,267	67.152													1		
L-11	⑤	L-11-⑤		本土產器	不明	胴部	1	23,910,405	21,557,237	67.187					1								1		
								合計	1	1	2	3	2	5	8	2	12	1	3	1	2	1	44		

第3表 ピット計測一覧

確認 グリッド	番号	挿図番号 図版番号	長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	断面の形状	長軸方向	出土遺物
			(cm)	(cm)	(cm)	上面				
K-10	1	第12図 図版6	15	(7)	6	不定形	柄杓状		N - 107° -E	沖縄産無釉陶器(1)
K-10	2	第12図 図版6	30	(13)	15	ほぼ円形	略V字状		N - 106° -E	土塊(3) 獸骨(1)
K-10	3	第12図 図版6	34	(21)	5	ほぼ円形	鍋底状		N - 133° -E	-
K-10	4	第12図 図版6	18	(11)	3	不定形	(鍋底状)		N - 97° -E	-
K-10	5	第12図 図版6	34	30	4	楕円形	鍋底状		N - 112° -E	土製品(2)
K-10	6	第12図 図版6	22	(18)	5	(楕円形)	(鍋底状)		N - 24° -E	沖縄産施釉陶器(1)
L-9	1	第12図 図版8	45	45	17	ほぼ円形	鍋底形		N - 152° -E	中国産青磁(1) 中国産青花(1) 沖縄産施釉陶器(1) 沖縄産無釉陶器(1) 土塊(2)

確認グリッド	番号	挿図番号 図版番号	長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	断面の形状	長軸方向	出土遺物
			(cm)	(cm)	(cm)	上面				
L-10	1	第12図 図版8	55	48	32	楕円形	U字状		N - 153° -E	中国產青磁(2) 中国產青花(1) 中国產褐釉陶器(1) 沖繩產無釉陶器(1) 土製品(2)
L-10	2	第12図 図版8	75	55	36	隅丸三角形	U字状		N - 120° -E	中国產青磁(2) 中国產青花(1) 沖繩產施釉陶器(2) 沖繩產無釉陶器(2) 沖繩產陶質土器(2) 鉄(1)
L-10	3	第12図 図版8	40	(10)	6	(楕円形)	鍋底状		N - 110° -E	-
L-10	4	第12図 図版8	34	33	20	ほぼ円形	U字状		N - 170° -E	中国產青磁(1) 沖繩產無釉陶器(1) 瓦(2) 土塊(4)
L-10	5	第12図 図版8	43	34	33	隅丸方形	略三角状		N - 117° -E	中国產青花(1) 沖繩產施釉陶器(1) 土塊(1)
L-10	6	第12図 図版8	30	27	20	ほぼ円形	U字状		N - 113° -E	土塊(1) 鉄(1)
L-11	1	第12図 図版9	44	40	7	ほぼ円形	鍋底状		N - 28° -E	-

第4表 遺物出土一覧

グリッド 種類	ピット 遺物	ピット 非土遺物	遺物中 遺病	表 保	第①層						K~10		測量調査				合計		
					一括		(0-20)	(20-40)	(40-60)	(60-80)	岐阜城上 高下塗		タペ	タペ	一括	point 1	point 3	point 4	point 5
					一括	タペ					タペ	タペ	タペ	タペ	タペ	タペ	タペ		
中國產	青花	1	4	3	9	24	98	54	1	19		6	8					227	
	白磁				1	1	1	1				1						5	
	青磁	1	6		3	7	29		2	1	2	1						52	
	青磁	2	1		1		43	31		5		1	1	1		1		87	
	無釉陶器						2	2										4	
	その他					1	3	1										5	
本土產	磁器	3		13	4	10	57	63		12		4	2		1			169	
	陶付	2		1			2	1							1			7	
	陶器			1		6	3	1		2								13	
	白磁			1			8											9	
内國產	施釉陶器	5	4	57	7	56	190	178		30	6	8	5					1	547
	無釉陶器	8	7	46	6	19	193	112		27		7	3	2	1	1	2	434	
	陶質土器	2	2	13	1	9	82	45		9	1	2	3					169	
	瓦質土器			1			2	1				1						5	
瓦	12	2	8	3	17	419	111		9	4	9	9		1				604	
磚				1														1	
円盤状製品	1					1	6	9		4								21	
土器	3					1	10			1								15	
土製品	1	5										1						7	
土塊土	2	10					1	18			6							37	
玉類								1										1	
金属製品	碧							2										2	
	銅貨							1							1			2	
	銀製品	1					2			1	2							6	
	鉄	2			1	3	8	19				1			1			35	
獸骨		1	1				6	2			1							11	
貝				1			11	1										13	
合計	44	45	145	34	153	1154	681	1	121	23	41	32	3	3	1	4	3	2488	

第VI章 遺物

本遺跡からの出土遺物は総数 2,488 点を数えた（第4表）。その多くが小片であった。その内、各グリッドからの出土（遺物包含層など）は 2,209 点と大半を占める。表探 34 点、試掘調査 11 点、ドット遺物として 44 点（第2表）を取り上げた。

遺構からの出土は、半裁したピットから 45 点（第3表）、礫集中遺構から 146 点であった（第4表）。遺物の種類としては、中国産陶磁器では、青花・白磁・青磁・褐釉陶器・無釉陶器、本土産陶磁器では、磁器・染付・白磁・陶器が見られた。また、沖縄産陶器では、施釉陶器・無釉陶器・陶質土器・瓦質土器などが見られた。その他、土器、瓦や壇、円盤状製品、玉類、骨・錢貨など多種多様な遺物が得られている。

出土数では沖縄産陶器が 1,155 点、瓦が 604 点と多く突出している。統いて中国産陶磁器 381 点、本土産陶磁器 198 点と続く。

遺物出土一覧を第4表に示し、以下、種類ごとに特徴的な遺物の概略を記す。

第1節 中国産青花

中国産陶磁器（381 点）では、先述した多様な種類が得られた。その内、青花が 227 点と多くを占めた。次いで褐釉陶器が 87 点、青磁 52 点、白磁 5 点、無釉陶器 4 点と続く（その他の資料 5 点）。

第5表 中国産青花観察一覧

法量単位: cm(残存値)

捕団番号 図版番号	種類	器種	部位	口 径 器 底 高 径	色調	文様・特徴など	出土地点
第14図 1 図版10の1	青花	碗	口縁部	15.4 (4.7) —	灰白色 (10Y 8/1)	口縁部資料。口縁部で強めの外反。 外面、口縁部直下と腰部に圓線を1条ずつ廻らせ、その間に草文を配り。 内面も口縁と腰部に圓線を1条ずつ廻らす。	L-11グリッド 第①層
第14図 2 図版10の2	青花	小碗	口縁部	9.2 (3.8) —	灰白色 (10Y 8/1)	口縁部資料。口縁部や外反する。 外面、口縁直下に圓線を2条、腹部には丸い花文を配し。空白に蔓様な文様で埋める。 内面、口縁直下に太めの圓線を1条、腰部に細い圓線を2条廻らす。 呉須の発色は濃い。	K-10グリッド 礫集中遺構(西)
第14図 3 図版10の3	青花	小碗	底部	— (3.2) 4.0	灰白色 (10Y 8/1)	底部資料。 絶跡だが、疊付けは露胎。 外面、細縁による蓮華唐草を描く。 高台には圓線を2条廻らす。 内面は文様なし。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第14図 4 図版10の4	青花	皿	底部	— (2.5) 8.4	灰白色 (10Y 8/1)	底部資料。 絶跡だが、疊付けは露胎。 残存の外面、外底面は文様なし。 内底に圓線2条、その内側に草花文を配す。全体構図不明。 呉須の発色は濃い。	L-10グリッド 第①層(0/20)

出土地点から見ると、第①層（0/20）、次いで第①層（20/40）からの出土で全体の約71%を占める。青磁が第①層最下部で、1点得られている。

これらの資料の中で多く得られた青花の中から4点を図化し、第14図に示す。また、観察を第5表に記す。

第14図1は、碗の口縁部である。外面胴部に呉須による草文を描く。L-11 グリッド第①層より出土。

同図2は、小碗で口縁から胴部にかけての資料である。外面胴部に呉須による花文と唐草文を配す。K-10 グリッド疊集中造構（西）より出土。

同図3は、小碗で底部資料である。外面胴部に呉須による蓮華唐草文を描く。L-10 グリッド第①層（0/20）より出土。

同図4は、皿の底部資料である。内底面に呉須による草花様の文様が見られるが、構図は不明。L-10 グリッド第①層（0/20）より出土。

第2節 本土産陶磁器

本土産陶磁器（198点）でも、多様な種類が得られている。磁器169点、染付7点、陶器13点、白磁9点である。出土地点から見ると、第①層（0/20）から70点、第①層（20/40）から65点、次いで、疊集中造構、第①層一括から16点、第①層（40/60）から12点と続く。得られた資料の中から磁器8点、染付1点、白磁1点と陶器3点を図化し、第15・16図に示す。観察は第6・7表に示す。

第15図1は、クロム青磁と称される小碗である。外面胴部に飛び跑文様が施される。K-10 グリッド疊集中造構（西）より出土。

同図2も小碗で口縁から高台にかけての資料である。外面胴部には「X」様を3つ横に連ねた単位のスタンプ文様を配置。見込みには、「雁金」を施す。K-10 グリッド ドット⑤ より出土。

同図3は、小碗で、口縁から高台までの資料である。胴部に銅版転写技法による桜の花と葉文が施される。間をおいて、ゴム判と見られる文字で、歌の一説（「・・・朝日に匂ふ・・・」）が施される。K-10 グリッド疊集中造構（東）より出土。

同図4は、小碗の口縁部資料で、同図3同様のゴム判と見られる文字で、同図3と同じ歌の一説（「・・・朝日に匂ふ山桜かな・・・」）が施される。K-10 グリッド疊集中造構（西）より出土。

同図5は、碗の底部資料で、外面と見込み呉須による花草文が施される。L-10 グリッド第①層（0/20）より出土。

同図6は、染付の碗で、外面に呉須による花草文が施される。L-10 グリッド第①層（0/20）より出土。

同図7から同図9は、型紙刷り技法による文様を施す。

同図7は口縁部資料で、外面に5弁の花と唐草、内面も5弁の花が帯状に施される。K-10 グリッド疊集中造構より出土。

第6表 本土産磁器・染付・白磁観察一覧

法量単位:cm(残存値)

挿図番号 図版番号	器種	部位	口 径 器 底 径	素地	文様・特徴など	出土地点
第15図 1 図版11の1	磁器 小瓶	口～底	8.2 3.8 3.4	灰白色 (5Y8/7)	クロム青磁の全形が窺える資料。 外面は赤や小さな緑色で、飛び墨文が4箇施される。 内面は白色、高台は「ハ」の字状に広がる形狀。 高台内、蓋付けは露胎。	K-10グリッド 築集中遺構(西)
第15図 2 図版11の2	磁器 小瓶	口～底	8.0 4.0 3.0	灰白色 (5Y8/1)	小瓶で、全形が窺える資料。 絶輪だが、蓋付けは露胎となる。 外面に、コバルトで、篆文を2種描く。 内底にも文様が見られる。 口唇部は輪鉢を施す。	K-10グリッド Fット⑤
第15図 3 図版11の3	磁器 小瓶	口～底	7.0 4.5 3.0	灰白色 (5Y8/7)	小瓶で、全形の復元可能な資料。 絶輪だが、蓋付けは露胎。口唇は丸味を持ち、口縁形 底口となる。 内底は「朝日に匂う山桜かな」と篆文。 高台に、コバルトで、篆文を2種描く。 内面は無文。	K-10グリッド 築集中遺構(東)
第15図 4 図版11の4	磁器 小瓶	口縁部	7.0 (3.7) —	灰白色 (5Y8/7)	小瓶の口縁資料。残存部、絶輪。 口唇やや尖り、口縁形は底口となる。 外面に、コバルトで「朝日に匂う山桜かな」と篆文を使い、 て施される。 内面は無文。	K-10グリッド 築集中遺構(西)
第15図 5 図版11の5	磁器 瓶	底部	— (3.7) 4.6	灰白色 (5Y8/7)	瓶の底部資料。絶輪だが、蓋付けは露胎。 外面にコバルトで、草花文が施される。腰部と高台に1本 ずつ團線が現れる。	I-10グリッド 第1層(0/20)
第15図 6 図版11の6	染付 瓶	底部	— (3.9) 5.6	灰白色 (10Y 8/1)	瓶の底部資料。 絶輪だが、蓋付けは露胎。 外、高台に2条、腰部に1条の團線を施す。腰部團 線より上方に篆文?が施されるが、空白部分が大きめ 構図などは不明。内面は文様なし。	I-10グリッド 第1層(0/20)
第15図 7 図版11の7	磁器 瓶	口縁部	14.4 (3.0) —	灰白色 (5Y8/7)	瓶の口縁資料。残存部絶輪。 口唇は舌状で大きく外反する。 外表面とともに、コバルトによる墨紙網の文様を施す。 内面は、唐草と五弁の花が配される。 内底は、同様な唐草と五弁花が横帶状に施され、 文様帶下に1条、腰部に2条の團線を施す。	K-10グリッド 築集中遺構
第15図 8 図版11の8	磁器 瓶	口縁部	12.6 (4.4) —	灰白色 (5Y8/1)	瓶の口縁資料。残存部絶輪。 口唇は舌状で大きく外反する。 内表面とともに、コバルトによる墨紙網の文様を施す。 外表面と腰部の墨紙網の文様を配す。 内面は、5弁の花と唐草を主とした墨紙網帯状に施す。 文様帶下に1条、腰部に2条の團線を施す。	K-10グリッド 築集中遺構
第15図 9 図版11の9	磁器 瓶	底部	— (1.7) 4.7	灰白色 (5Y8/1)	瓶の底部資料。絶輪だが、蓋付けは露胎となる。 内表面とともに、コバルトによる墨紙網の文様を施す。 外表面は腰部欠損のため文様構成不明。腰部に三角 形向かって合せした幾何学文を帯状に配す。 高台に團線を1条施す。 内底面に5弁の花を施す。目底が3個確認できる。	K-10グリッド 築集中遺構(東)
第15図 10 図版11の10	白磁 盆	口～底 部	12.6 2.6 7.8	灰白色 (5Y8/7)	口縁から底部にかけての資料。 口唇は丸くなり、やや外反する。 外表面縁近くに、素地の亀裂が見られる。 底面は中央に向かって反る形状。 蓋付けと外底面中央付近は、露胎となる。	K-10グリッド 築集中遺構

同図8も口縁部資料で、外面に4弁の花と唐草、内面は5弁の花と唐草を帶状に施す。同図7に比べ、文様の幅や花弁の色の滲みなど雑さが目立つ。K-10 グリッド縦集中造構より出土。同図9は、底部資料で、腰部に幾何学文様、見込みに5弁花の文様を施し、目跡が3個確認できる。文様は全体的に色が濃く、滲みも見られる。K-10 グリッド縦集中造構(東)より出土。

同図10は、白磁の皿で、口縁から高台にかけての資料である。外面の口縁折り返し部に素地の細かい亀裂が確認できることから型成形と見られる。K-10 グリッド縦集中造構より出土。

第16図1は、壺の底部資料である。外面に灰釉を施し、斜め格子の文様を描く。L-11 グリッド第①層より出土。

同図2も壺の底部資料である。内外面ともに褐色釉が剥落し、経年を感じさせる。L-10 グリッド第①層(0/20)より出土。

同図3は、急須の口縁部から胴部にかけての資料である。内外面ともに茶褐色で艶がある。外面に青色で竹の文様が描かれ、文様は厚みを持ち剥がれた部分も見られる。K-10 グリッド縦集中造構(西)より出土。

第7表 本土産陶器観察一覧

法量単位:cm(残存値)

排図番号 図版番号	器種	部位	口 径 高 底 径	色 調 素 地	文様・特徴など	出土地点
第16図 1 図版12の1	壺	底部	— (4.0) 12.4	外面:黒灰色 内面:にがい・黄褐色 素地:黒灰色 (10YR 5/1)	底部資料、壺と見られる。 外面に墨ヤマ調窯痕が見られる。外面、灰釉を施す。釉色より 深い灰色で、斜め格子の文様が描かれる。外底面も灰釉を施す。 剥けた内面は、露胎となる。 素地は芯部が黄褐色、外側は茶褐色のサンドイッチ状。	L-11グリッド 第①層
第16図 2 図版12の2	壺	底部	— (2.5) 12.8	外面:黒褐色 内面:黒褐色 素地:赤褐色 (5YR 4/6)	底部資料、壺と見られる。 残存する内面有釉部、外底面は露胎となる。 内外面ともに、褐色釉が剥落し、外面、底面近く、ナマ調窯痕が 見られ、裸となる。内面も調窯痕が確認できる。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第16図 3 図版12の3	急須	口縁部	5.8 (4.1) —	外面:褐暗褐色 内面:褐暗褐色 素地:赤褐色 (10R 4/6)	口縁部資料。口縁内部から外面は施釉。 内側は口縁部上へへ走り、肩部で内側へ曲る形状。 口縁は段々と上へへ走り、肩部で内側へ曲る形状。 脚部に、円形の剥がれたような痕が見られる。注口の接続部の 可能性がある。 外底肩部に、青色の竹様の文様が施される。また他の形状で 色が剥がれ落ちた痕が見られる。 内面は無文。	K-10グリッド 縦集中造構(西)

第3節 沖縄産陶器

沖縄産陶器（1,155点）では、施釉陶器547点、無釉陶器434点、陶質土器169点、瓦質土器5点の4種が確認された。層序別の出土状況は、第①層（0/20）の466点と第②層（20/40）の335点を合わせて801点で全体の約69%を占める。次いで、礫集中遺構から116点、第①層一括から86点、第①層（40/60）から66点と続く。

図化した資料を種類別に第17図から第20図に、個々の観察を第8・9表に示す。

1. 施釉陶器

第17図1は、碗の底部である。茶褐色釉の單掛け資料で、釉に艶はなく発色していない。L-10グリッド①層0/20より出土。

同図2・3は、どちらも碗の底部資料で、内外面に白化粧を施し、透明釉を掛ける。K-10グリッド礫集中遺構出土。

同図4は、「あんびん」と称される大型急須の口縁から胴部の資料である。取手の元部と注口が若干残存する。内外面は黒色釉を施し、内面の蓋合せ部は露胎となる。K-10グリッド礫集中遺構（東）より出土。

同図5は、急須の底部資料である。外面は白化粧を施し、上部のみ透明釉を掛ける。底部は三角錐形の脚が3個付くタイプだが1個のみ残存する。K-10グリッド礫集中遺構より出土。

同図6は、壺と見られる資料の底部である。外面黒色釉を施す。高台と内面は露胎となる。K-10グリッド礫集中遺構より出土。

同図7は、火炉と見られる形状の底部から胴部にかけての資料である。外面腰部まで黒色釉を施す。腰部以下と内面は露胎となる。K-10グリッド礫集中遺構より出土。

2. 無釉陶器

第18図1は、鉢の口縁部資料である。口縁は、逆「L」字状に折れる。口縁直下にヘラ調整痕が見られる。L-10グリッド第①層（0/20）より出土。

同図2は、鉢の底部資料である。器内外面に、ヘラ調整痕が見られる。L-10グリッド第①層（0/20）より出土。

同図3も鉢の底部資料である。底部と外底面にヘラ調整痕が見られる。L-9グリッド第①層（0/20）より出土。

同図4から6は、擂鉢の底部である。4は内面のすり目が細かく、内底面に白色（石灰？）の塊が付着する。K-10グリッド礫集中遺構より出土。

同図5は、内面のすり目12本一組と見られ、外面下部と外底面にヘラ調整痕が見られる。L-10グリッド第①層（0/20）より出土。

同図6は、内面のすり目は一組8本以上で施される。外面と外底面にヘラ調整痕が見られる。L-10グリッド第①層（0/20）より出土。

第19図1は、壺の底部から胴部にかけての資料である。外底面をナデ調整。内面は擦摩痕が明瞭。

K-10 グリッド窯集中造構（東）より出土。

同図2も壺の底部資料である。外面下部をヘラ調整するが難、外底面は未調整、内面は焼成痕が見られる。L-10 グリッド第①層より出土。

同図3は、甕の口縁部資料である。幅広の帯状の口縁形状で、凹線が廻る。L-10 グリッド第①層（0/20）より出土。

3. 瓦質土器

第19図4は、「ミジクブサー」と称される鉢の口縁から胴部にかけての資料である。口唇先端は舌状で内湾する器形。K-10 グリッド窯集中造構（西）より出土。

4. 瓦質土器

第20図1は、型作りによる炉の口縁部と見られる。平面形状は方形になると考えられる。口縁は逆「L」字状に折り曲げ、全体はナデ調整が施される。残存の形状などから「馬蹄形焜炉」の可能性が示唆される。L-10 グリッド第①層（0/20）より出土。

第8表 沖縄産施釉陶器観察一覧

法量単位:cm(残存部)

補遺番号 図版番号	器種	部位	口 径 器 底 高 径	色調	素地	文様・特徴など	出土地点
第17図 1 図版13の1	碗	底部	— (4.3) 5.4	外面:灰黃褐色 内面:灰黃褐色	褐灰色 (10YR 5/1)	碗の底部資料である。 外面から内底面まで施釉。底部から外底面は直角となる。 内底面に砂粒大的付着物が見られる。 釉は発色せず、茶褐色で、艶はない。	L-10グリッド 窯集中造構 第①層(0/20)
第17図 2 図版13の2	碗	底部	— (4.0) 5.8	外面:灰白色 内面:灰白色	に近い黄褐色 (10YR 7/4)	碗の底部資料である。 外面全体に白石粉を施し、透明釉を施釉。蓋付けは直角である。 見込みに蛇の目模刻ぎを施す。蛇の目内に器物の重ね痕 が確認できる。 内底面に貯入が見られる。	K-10グリッド 窯集中造構
第17図 3 図版13の3	碗	底部	— (2.5) 6.4	外面:灰白色 内面:灰白色	に近い黄褐色 (10YR 7/4)	碗の底部資料である。 外面全体に白石粉を施し、透明釉を施釉。蓋付けは直角である。 見込みに蛇の目模刻ぎを施す。蛇の目内に器物の重ね痕 が確認できる。 全形も貯入が見られる。	K-10グリッド 窯集中造構
第17図 4 図版13の4	急須	注口	11.7 (10.3) —	外面:黒色 内面:黒色	褐灰色 (10YR 5/1)	大型の急須で、口縁から注口までの直角である。内底面に 黒色釉を施す。口縁の裏合せ部分は施釉しない。外から内 方向に直角約2cmの孔を設け注口を張り付ける。把手は開 き材と蓋材で直角約4.5cmの形状。把手は注口直上から反対 側に張り付けられる。 把手、注口先端は欠損。	K-10グリッド 窯集中造構(東)
第17図 5 図版13の5	急須	底部	— (3.7) 7.3	外面:灰白色 内面:灰白色	淡黄色 (2.5Y 8/3)	急須の底部である。外面は白石粉を施し、呂宋の文様を施す。 蓋は外側に白石粉を施す。蓋内側は茶褐色で、蓋付けは直角である。 裏合せの状態で先端は欠損する。側面は不規則。内底面に 透明釉のみを施釉。底部には三角錐状の脚が3ヶ付くタイプ である。外底面に器物の落着が見られる。	K-10グリッド 窯集中造構
第17図 6 図版13の6	甕	底部	— (10.0) 11.2	外面:黒色 内面:に近い黄褐色	明黄褐色 (10YR 7/6)	形状から甕と。 下部には黒色釉を施釉。高台は直角となる。 内底面も直角である。	K-10グリッド 窯集中造構
第17図 7 図版13の7	火炉	底部	— (7.8) 9.0	外面:黒色 内面:淡黄褐色	淡黄褐色 (10YR 8/3)	腹部は直に腰部まで至り、腰部から高台へ「く」の字状に折 れる形状。 腰部まで施釉。黑色釉を施釉し、それ以下と内面は直角と なる。 下部に開口が3箇所ある。外底の残存上部に突起が見られ る。	K-10グリッド 窯集中造構

第9表 沖縄産無釉陶器・陶質土器・瓦質土器観察一覧

法量単位:cm(残存値)

辨別番号 図版番号	種類	器種 部位	口 径 高 底 径	色調	文様・特徴など	出土地点
第18図 1 図版14の1	無釉陶器	鉢 口縁部	26.1 (1.8) —	外面:明赤褐色 内面:明赤褐色	口縁に「L」字に折れ形の形状。 縁上面の外縁に凹線が1条ある。 口縁下面に、ヘラ調整痕が見られ、稜線を成す。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第18図 2 図版14の2	無釉陶器	鉢 底部	— (4.5) 13.6	外面:明赤褐色 内面:明赤褐色	鉢の底部資料。 外底下面にヘラ調整を施す。外底面にもヘラ調整を施すが一部行き届かない。 内面には蠟膜形成痕が明瞭。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第18図 3 図版14の3	無釉陶器	鉢 底部	— (4.3) 19.3	外面:明赤褐色 内面:明赤褐色	底部と外底面にヘラ調整痕が明瞭に残る。 底面中央部に、打削いた様な形状の孔が見られる。破損はないか二次使用痕かは不明。	L-9グリッド 第①層(0/20)
第18図 4 図版14の4	無釉陶器	擂鉢 底部	— (6.5) 13.7	外面:暗褐色 内面:赤褐色	擂鉢の底部資料。外面は暗褐色を呈する。外面はヘラ調整を施す。内面には細いハサワ目が見られる。内底面に砂粒などの白色の塊が付着する。	K-10グリッド 擂集中造構
第18図 5 図版14の5	無釉陶器	擂鉢 底部	— (5.0) 10.9	外面:明赤褐色 内面:明赤褐色	擂鉢の底部資料。 外底面と外底面にヘラ調整を施す。 内面には12本一组と見られる目が施される。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第18図 6 図版14の6	無釉陶器	擂鉢 底部	— (4.2) 12.0	外面:赤褐色 内面:赤褐色	擂鉢の底部資料。 外底面と外底面にヘラ調整を施すが複数。 調整痕は右方向に成される。 内面には1組以上で施される。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第19図 1 図版15の1	無釉陶器	壺 胴～底部	— (10.2) 9.3	外面:にぶい黄褐色 内面:灰色	壺の胴部から底部にかけての資料。 外面にヘラ調整を施すが複数。底面から約2.5cmの所に明瞭な調節による縫合が見られる。 内面は、蠟膜形成痕が明瞭。	K-10グリッド 擂集中造構(東)
第19図 2 図版15の2	無釉陶器	壺 底部	— (3.0) 12.0	外面:赤褐色 内面:赤褐色	壺の底部資料。 外底面にヘラ調整を施すが複数でヘラ痕が抉れる。外底面はヘラ調整。 内面には蠟膜痕が見られる。	L-10グリッド 第①層
第19図 3 図版15の3	無釉陶器	壺 口縁部	32.0 (4.8) —	外面:暗褐色 内面:暗赤褐色	壺の口縁資料。 破片のため口径は推定である。 口縁は幅広で、平坦になる。口縁から直に下へ延びる形状。 外底に凹線が3条ある。その下に少し間を開けて凸線が1条確認できる。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第19図 4 図版15の4	陶質土器	鉢 口縁部	17.4 (5.5) —	外面:橙色 内面:橙色 素地:橙色	口縁先端は舌状で、内溝する唇形。 丁寧な蠟膜形成、調整が施される。 器面は内外共に滑らか。	K-10グリッド 擂集中造構(西)
第20図 1 図版15の5	瓦質土器	炉 口縁部	— (5.4) —	外面:橙色 内面:橙色	平面形は方形になると見られる。 口縁に「L」字状に折り上げ、幅約4cmの平底面になる。 先端に向かって厚みは薄くなる。約20mmから7mm。 口縁を側面部側に折り上げ、縁を削り調整。折曲げた部分は焼付けが難しく隙間が見られる。 内面にはヘラ調整が施される。胴部の厚みはほぼ一定で、約15mm。 外底面に約幅1cm、長さ3.2cmの方形状凸が見られる。	L-10グリッド 第①層(0/20)

第4節 円盤状製品

本遺跡から総数21点の出土があった。内訳は、沖縄産無釉陶器8点、陶質土器5点、瓦5点、中国産青花1点、中国産褐釉陶器1点、本土産磁器1点の出土である(第12表)。出土地点を見ると、L-10グリッドから14点と出土数の半分以上を占める。層序別での出土状況は、第①層(0/20)から6点、第①層(20/40)から9点、第①層(40/60)から4点、第①層一括及びドット取り上げ遺物で1点ずつである。

円盤状製品21点中15点を図化し、第21図に示した。計測一覧を第10表に、観察一覧を第11表に、素材別出土状況を第12表及び第13図に示した。参照いただきたい。

第5節 玉類

本遺跡から、石製と見られる小玉が1点出土している。第22図1に図示し、観察を第13表に示す。色調は赤茶色を呈す。平面形は丸味を帯びた三角形を状呈し、ほぼ中央に直径約2mmの孔が穿たれる。L-9グリッド第①層(0/20)より出土。

第6節 金属製品

本遺跡から出土した金属製品は45点である。内訳は簪2点、錢貨2点、鉄製品6点、鉄35点であった。

簪2点及び錢貨2点を図化し、第22図に示した。また観察を第13表に、錢貨の計測一覧を第14表に示した。以下に図化した資料の概要を記す。

第22図2は、簪で、頭部が「耳かき状」を呈し、竿部は側面から観るとほぼ半分から屈曲している。L-10グリッド第①層(20/40)より出土。

同図3も簪で、頭部「耳かき状」を呈す。竿部は2ヶ所で曲がり本来の形状を保っていない。L-10グリッド(20/40)より出土。

第22図4・5は、錢貨で、どちらも破損している。

同図4は、約半分残存の資料で、鏽や磨耗で文字は辛うじて「寶」と「永」の一部が確認できる。残存の文字から「寛永通寶」とした。試掘調査point5より出土。

同図5は、約1/4残存の資料で、文字があったとみられる箇所に僅かな盛り上がりが確認できた。鏽や磨耗で判読は不能である。L-10グリッド(20/40)より出土。

第10表 円盤状製品計測一覧

法量:cm,g

捕获番号 計測番号	種類	部位	完／破損	長径	短径	厚さ	重さ	出土地
第21図1 計測No.6	青花	胴部	完	1.1	1.0	0.4	0.6	L-10グリッド (20/40)
第21図2 計測No.10	沖縄産陶質土器	胴部	完	2.0	2.0	0.4	1.4	K-11グリッド 第①層(20/40)
第21図3 計測No.12	沖縄産陶質土器	胴部	完	2.0	1.8	0.4	1.6	L-11グリッド 第①層(40/60)
第21図4 計測No.11	沖縄産無釉陶器	胴部	完	2.3	2.2	0.9	5.9	L-10グリッド 第①層(0/20)
第21図5 計測No.1	沖縄産陶質土器	胴部	完	2.5	2.2	0.4	2.3	L-10グリッド 第①層(40/60)
第21図6 計測No.13	沖縄産無釉陶器	胴部	完	3.5	3.1	1.2	17.4	L-10グリッド 第①層(0/20)
第21図7 計測No.14	沖縄産無釉陶器	胴部	完	3.7	3.2	1.1	18.2	L-10グリッド 第①層(0/20)
第21図8 計測No.2	瓦	胴部	完	3.6	3.4	1.4	18.2	L-10グリッド (20/40)
第21図9 計測No.3	瓦	胴部	ほぼ完	3.8	3.5	1.3	18.2	L-10グリッド (20/40)
第21図10 計測No.4	沖縄産無釉陶器	胴部	完	3.9	3.8	1.1	18.0	L-10グリッド (20/40)
第21図11 計測No.5	沖縄産無釉陶器	胴部	完	3.9	3.6	1.1	18.9	L-10グリッド (20/40)
第21図12 計測No.8	瓦	胴部	完	4.1	3.9	1.7	30.7	L-10グリッド 第①層(0/20)
第21図13 計測No.9	瓦	胴部	完	5.1	4.8	1.3	32.3	K-11グリッド ドット@
第21図14 計測No.7	沖縄産無釉陶器	胴部	ほぼ完	5.3	5.2	1.7	66.1	L-10グリッド 第①層(0/20)
第21図15 計測No.15	瓦	胴部	ほぼ完	6.2	6.0	1.6	60.9	L-10グリッド 第①層(40/60)
- 計測No.18	本土産磁器	胴部	完	2.1		0.6	3.0	L-11グリッド 第①層
- 計測No.17	中国産褐釉陶器	胴部	破損 1/2	4.0		0.6	3.8	L-10グリッド 第①層(0/20)
- 計測No.20	沖縄産無釉陶器	胴部	完	4.4		1.2	21.8	L-11グリッド 第①層(20/40)
- 計測No.21	沖縄産無釉陶器	胴部	ほぼ完	3.6		0.9	19.3	L-11グリッド 第①層(20/40)
- 計測No.16	沖縄産陶質土器	胴部	破損 1/2	2.7		3.1	1.5	L-10グリッド 第①層(40/60)
- 計測No.19	沖縄産陶質土器	胴部	破損 1/2	3.6		0.5	5.6	L-10グリッド (20/40)

第11表 円盤状製品観察一覧

法量単位: cm, g

挿図番号 図版番号	種類	部位	完・破	長 径 最 大 厚 重 量	素地	文様・観察など	出土地点
第21図 1 図版16の1	青花	胴部	完	1.05 1.00 0.4 0.6	灰色 (N 8/)	青花碗の胴部を利用。外面は呉須による文様が見られる。構成は不明。 周辺部を打削整形する。 平面形は、円形を呈す。	L-10グリッド (20/40)
第21図 2 図版16の2	陶質土器	胴部	完	2.0 1.95 0.4 1.4	橙色 (5YR 6/6)	陶質土器の胴部、清曲部分を利用。 周辺部を打削整形し、研磨を施す。全体に磨耗している。 平面形は、円形を呈す。	K-11グリッド 第①層(20/40)
第21図 3 図版16の3	陶質土器	胴部	完	2.0 1.8 0.4 1.6	橙色 (5YR 6/6)	陶質土器の胴部を利用。 周辺部を打削整形する。全体に磨耗している。 平面形は、ほぼ円形を呈す。	L-11グリッド 第①層(40/60)
第21図 4 図版16の4	無釉陶器	胴部	完	2.3 2.2 0.9 5.9	明赤褐色 (2.5YR 5/6)	無釉陶器の胴部を利用。内面に輪轂調整の痕が見られる。 周辺部を打削整形する。剥離時の角が残り、整形は粗い。 平面形は、略方形を呈す。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第21図 5 図版16の5	陶質土器	胴部	完	2.5 2.2 0.4 2.3	橙色 (5YR 6/6)	陶質土器のやや清曲した胴部を利用。 周辺部を打削整形する。全体に磨耗し、剥離痕も滑らか。 平面形は、梢円形を呈す。	L-10グリッド 第①層(40/60)
第21図 6 図版16の6	無釉陶器	胴部	完	3.5 3.1 1.2 17.4	にごい赤褐色 (5YR 4/4)	無釉陶器の胴部を利用。内面に輪轂調整の痕が見られる。 周辺部を打削整形する。内面際に細かい整形痕が見られる。 平面形は、梢円形を呈す。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第21図 7 図版16の7	無釉陶器	胴部	完	3.7 3.2 1.1 18.2	暗赤褐色 (5YR 3/3)	無釉陶器の胴部を利用。 周辺部を打削整形する。整形は粗い。 平面形は、略方形を呈す。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第21図 8 図版16の8	灰色瓦	胴部	完	3.6 3.4 1.4 18.2	橙色 (5YR 7/8)	瓦の胴部を利用。 周辺部を打削整形する。 全体に磨耗している。裏面に微かな布目が確認できる。 平面形は、ほぼ円形を呈する。	L-10グリッド (20/40)
第21図 9 図版16の9	瓦	胴部	ほぼ完	3.8 3.5 1.3 18.2	明赤褐色 (2.5YR 5/6)	瓦の胴部を利用。 周辺部を打削整形する。 裏面に剥離が見られる。裏面には、布目が確認できる。 平面形は、ほぼ円形を呈す。	L-10グリッド (20/40)
第21図 10 図版16の10	無釉陶器	胴部	完	3.9 3.8 1.1 18.0	暗赤褐色 (5YR 3/3)	無釉陶器の胴部、清曲した部分を利用。 周辺部を打削整形する。裏面に輪轂調整痕が見られる。 平面形は、略方形を呈す。	L-10グリッド (20/40)
第21図 11 図版16の11	無釉陶器	胴部	完	3.9 3.6 1.1 18.9	暗赤褐色 (5YR 3/6)	無釉陶器の胴部を利用。 裏面に輪轂調整痕が見られる。 周辺部を打削整形し、裏面際は細い整形を施す。 平面形は、ほぼ円形を呈す。	L-10グリッド (20/40)
第21図 12 図版16の12	瓦	胴部	完	4.1 3.9 1.7 30.7	褐灰色 (7.5YR 5/1)	瓦の胴部を利用。 周辺部を打削整形する。全体に磨耗している。裏面に、僅かな布目が確認できる。 平面形は、ほぼ円形を呈す。	L-10グリッド 第①層(0/20)

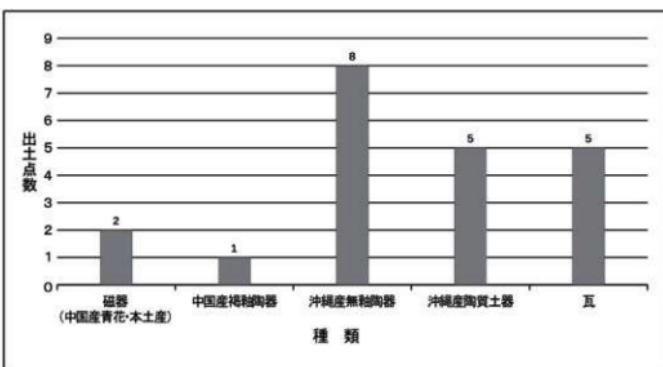
拂岡番号 図版番号	種類	部位	完・破	長 短 径 最大厚 重 量	素地	文様・觀察など	出土地点
第21図 13 図版16の13	瓦	胴部	完	5.1 4.8 1.3 32.3	橙色 (5YR 6/6)	瓦の胴部を利用。 周辺部を打削整形する。剥離が表面にも確認できる。 裏面に布目が見られる。 平面形は、ほぼ円形を呈す。	K-1グリッド ドット跡
第21図 14 図版16の14	無釉陶器	胴部	破	5.3 5.2 1.7 66.1	にぶい赤褐色 (5YR 4/4)	無釉陶器の胴部を利用。 表面に細孔跡が数条確認できる。裏面は輪郭整形 跡が見られる。 周辺部を打削整形する。また裏面際は、細かい剥 離で、丁寧に調整される。 平面形は、ほぼ円形を呈す。	L-10グリッド 第①層(0/20)
第21図 15 図版16の15	瓦	胴部	ほぼ完	6.2 6.0 1.6 60.9	褐灰色 (7.5YR 5/1)	瓦の側端部を利用。 裏面に布目が明瞭に残る。 周辺部を打削整形する。表面に大きめの剥離が見 られる。使用時のものは不明。 平面形は、ほぼ円形を呈す。	L-10グリッド 第①層(40/60)

第12表 円盤状製品素材別出土一覧

素 材	出土点数 ()内は破損	平均値 (単位 : cm, g)	
		長径	重さ
磁器 (中国産青花・本土産)	2	1.6	1.8
中国産褐釉陶器	1 (1)	—	—
沖縄産無釉陶器	8	3.8	23.2
沖縄産陶質土器	5 (2)	2.2	1.8
瓦	5 (2)	4.6	32.0
合 計	21		

*()内の数は出土点数に含まれる。

※平均値は「破損」を除いた平均。



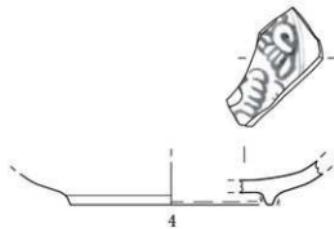
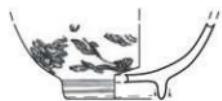
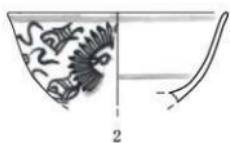
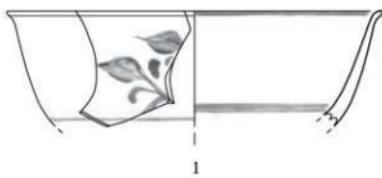
第13図 円盤状製品素材別出土状況

第13表 玉類・金属製品観察一覧

辨認番号 図版番号	種類	器種	完／破	長さ 厚さ 重量	形状・特徴など	法量単位:cm,g 出土地点
第22図 1 図版17の1	玉類	小玉	完形	- - 0.35	石製と見られる資料。 裏面が見られ、平面形状は略三角形状。立面は橢円形となる。 色調は赤茶色を呈する。 長径:7mm、高さ:6mm、孔径:2mmを測る。	L-9グリッド 第①層(0/20)
第22図 2 図版17の2	金属製品	管	破損	9.0 0.27 3.33	管の紐曲した資料。 現前の形状は「耳かき形」、竿部は二つに曲がっている。 反曲は欠損する。磨耗している。頭部の幅は3.5mm。 竿部の断面形状は方形。残存の長さを延ばした場合約10.4cmとなる。	L-10グリッド (20/40)
第22図 3 図版17の3	金属製品	管	完形	5.3 0.28 3.65	管の紐曲した資料。 頭部の形状は「耳かき形」、頭部の幅は3.5mm。 竿部は曲がり、「コ」の字状となる。竿部の断面形状は方形で、先端は尖る形状。長さを延ばした場合約9.5mmとなる。	L-10グリッド (20/40)
第22図 4 図版17の4	金属製品	錢貨	破損	- - -	錢貨の約半分残存の資料。 縫や磨耗で文字はすり減り、「寶」と「永」の一部が確認できるため「寛永通寶」と思われる。「寶」の文字の左上側に欠けが見られる。裏面は銅板で郭や縁の段が僅かに残るのみである。 推定外径:25mm、縁の厚み:1.2mm、郭の厚み:1.15mm、 文字のある所:0.9mm、文字のない所:0.8mmである。	試掘point5
第22図 5 図版17の5	金属製品	錢貨	破損	- -	錢貨の約1/4残存の資料。 縫や磨耗で文字は判読不能。文字らしき所が僅かに盛り上がる。推定外径:30mm、縁の厚み:1mm、郭の厚み: 1mm、文字のある所:1.05mm、文字のない所:0.7mmである。	L-10グリッド (20/40)

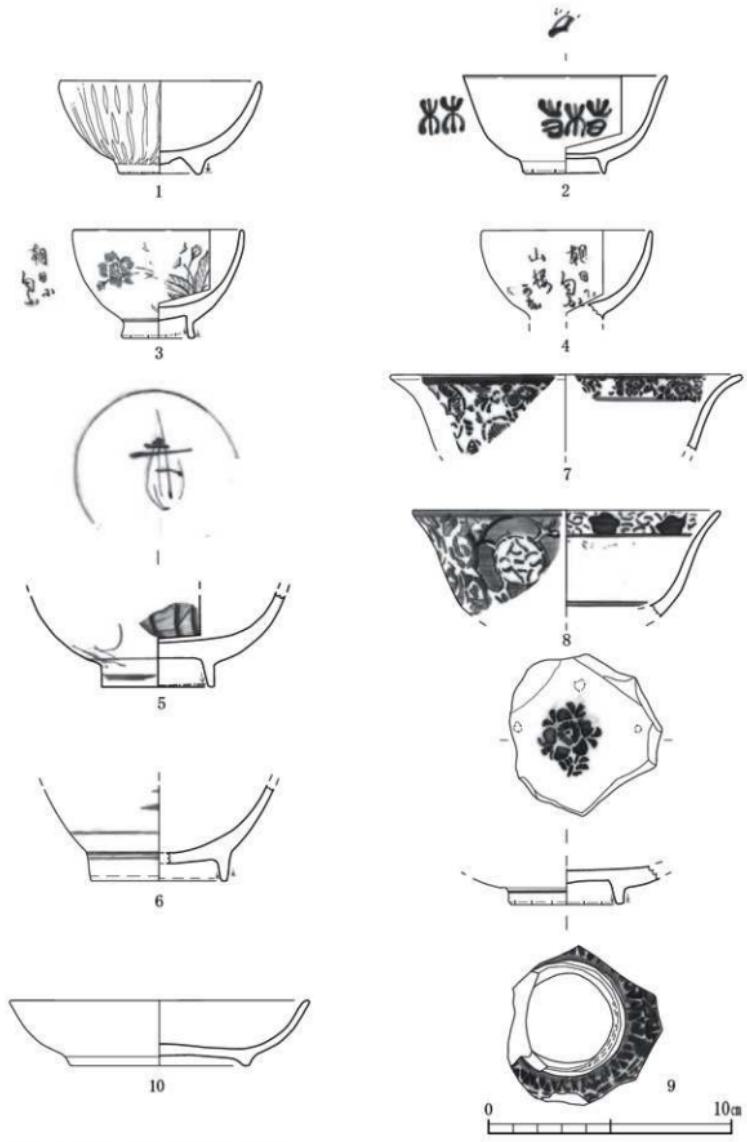
第14表 錢貨計測一覧

辨認番号 計測No.	錢貨名	初鑄年	書体	背文	残存率	磁力	法量 (mm · g)				その他の計測値	出土地点	
							外径	孔径	厚さ	重量			
第22図 4 計測No.1	○(2)○ 寶	江戸	1697	楷書	不明	1/2	無	推定 25.0	-	1.20	1.10	縁の厚み: 1.2mm 郭の厚み: 1.15mm 文字のある所: 0.9mm 文字のない所: 0.8mm	試掘 point 5
第22図 5 計測No.2	判読不能	-	-	不明	1 / 4	無	推定 30.0	-	1.10	1.00	縁の厚み: 1.1mm 郭の厚み: 1.0mm 文字のある所: 1.05mm 文字のない所: 0.7mm	L-10 グリッド (20/40)	

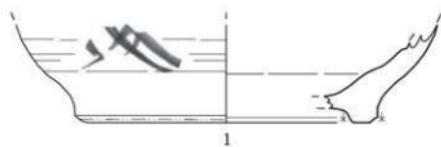


0 10cm

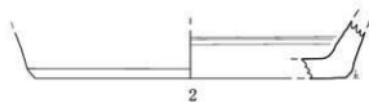
第14圖（図版10）中国産青花：碗・小碗・皿



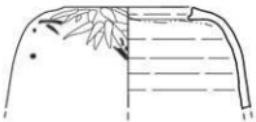
第15図（図版11） 本土産磁器：小碗・碗
本土産染付：碗
本土産白磁：皿



1



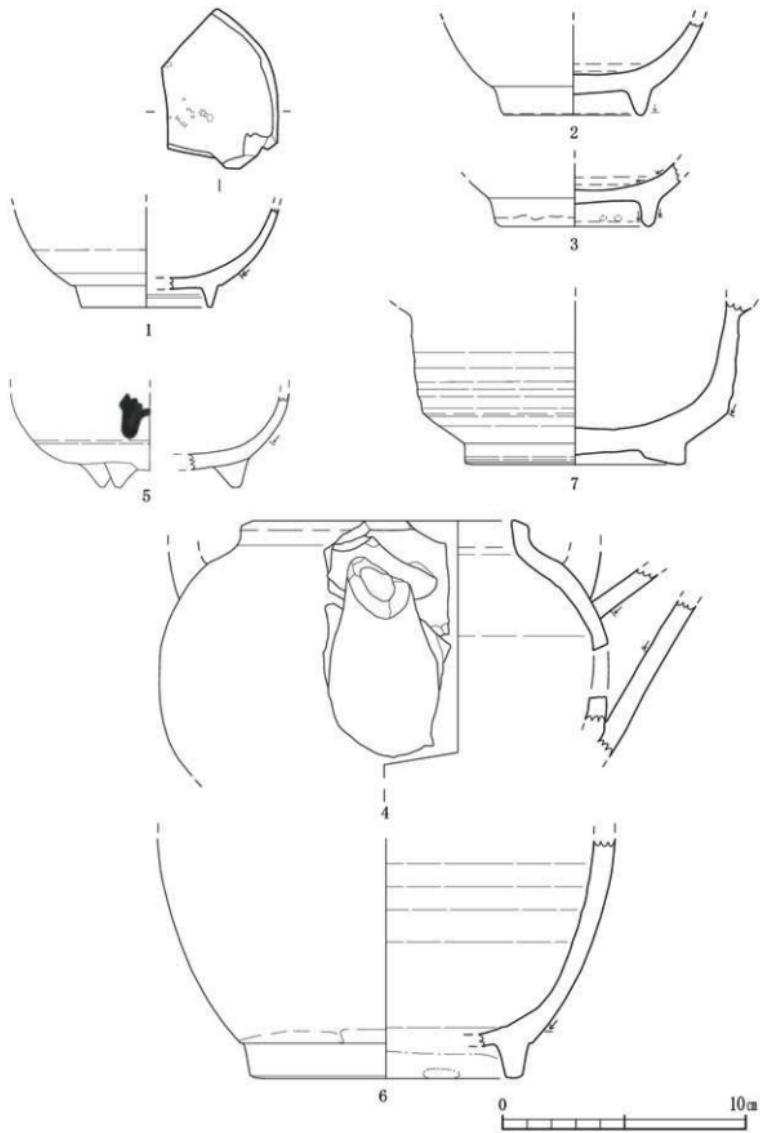
2



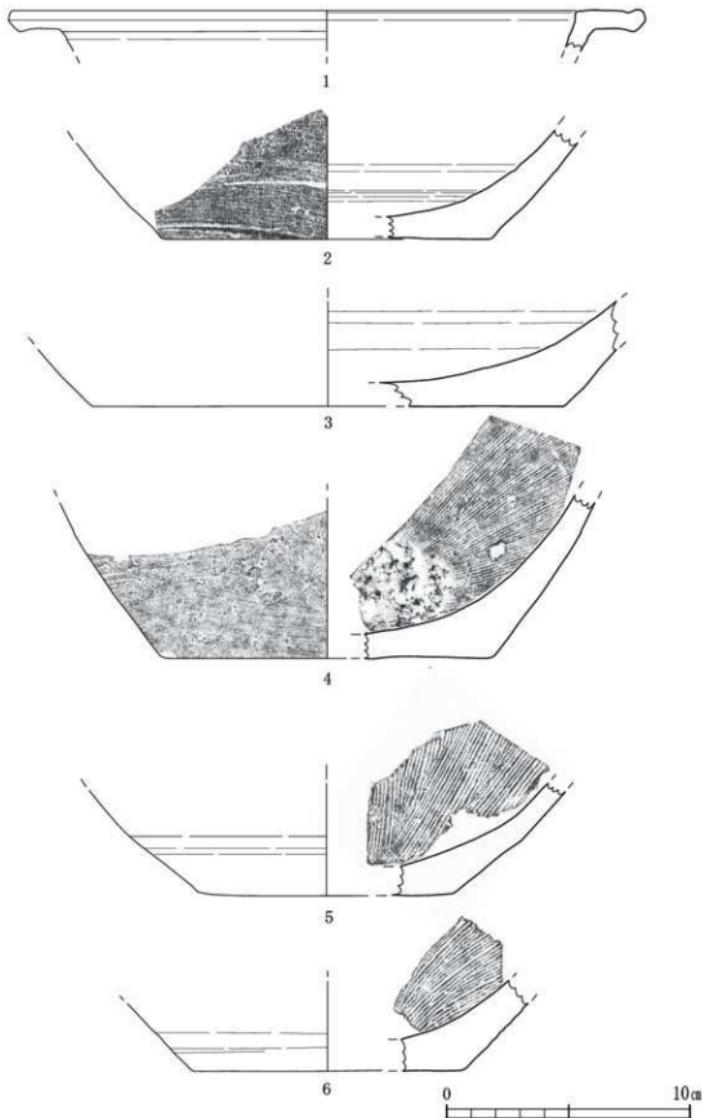
3



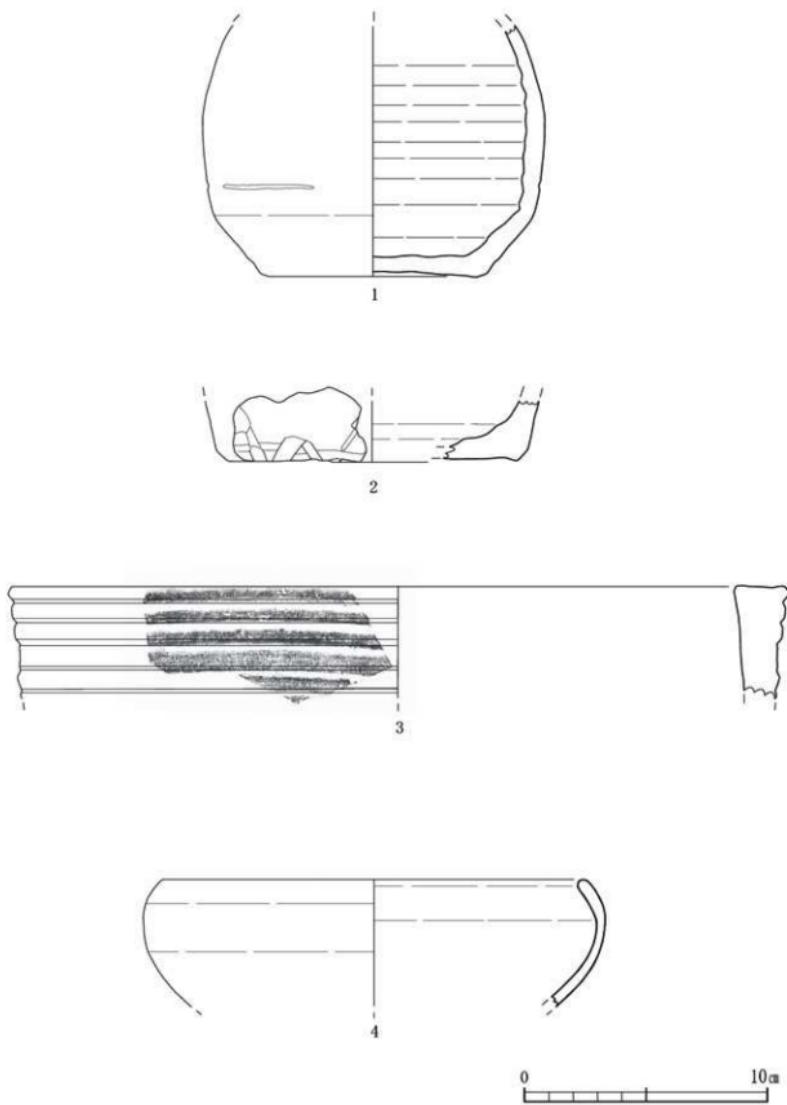
第16図(図版12) 本土産陶器:壺・急須



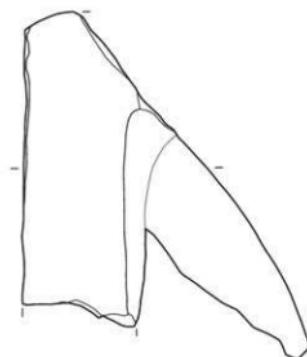
第17図(図版13) 沖縄産施釉陶器:碗・急須・壺・火炉



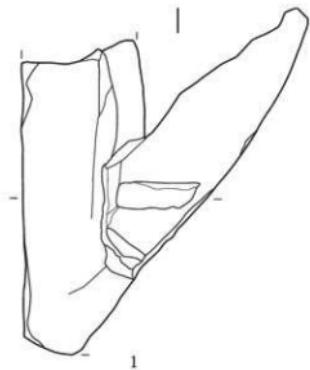
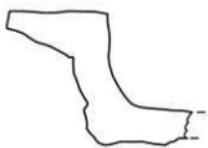
第18図(図版14) 沖縄産無軸陶器①:鉢・擂鉢



第19図(図版15) 沖縄産無釉陶器②: 壺・甕 陶質土器:鉢



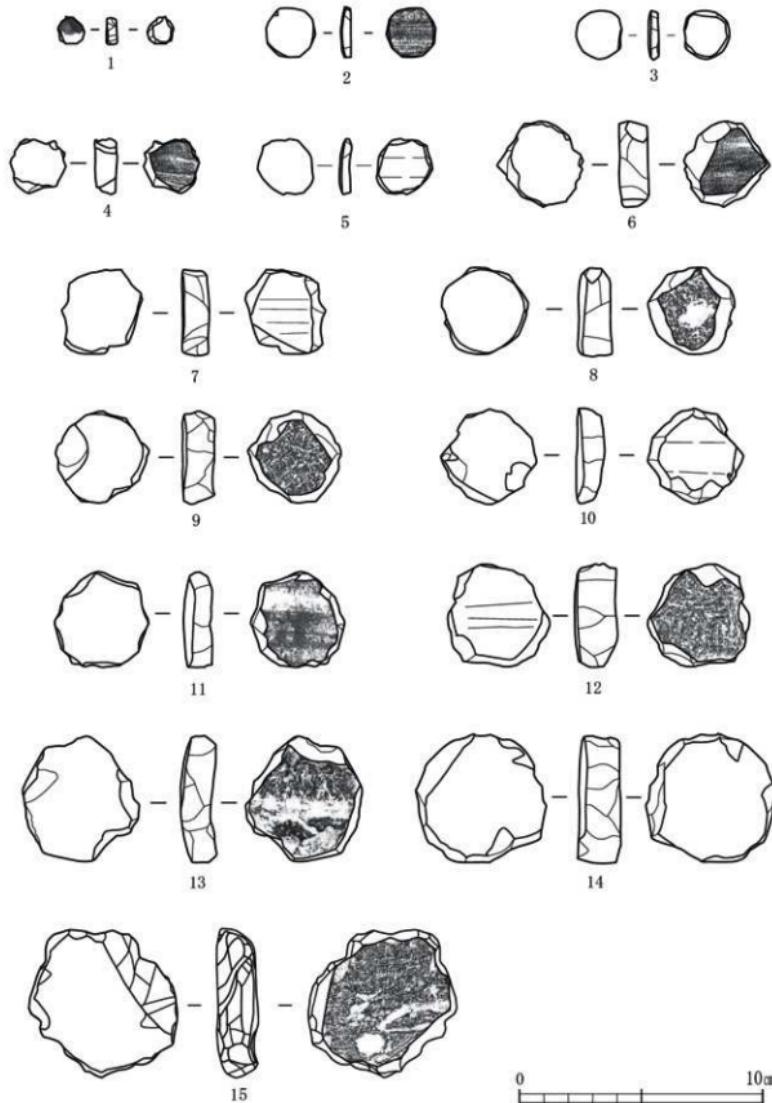
1



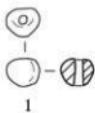
1



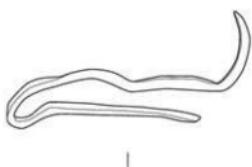
第20図(図版15) 瓦質土器: 炉



第21図(図版16) 円盤状製品



1

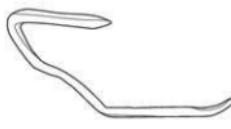


1

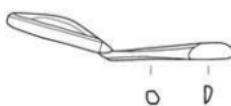


O D

2

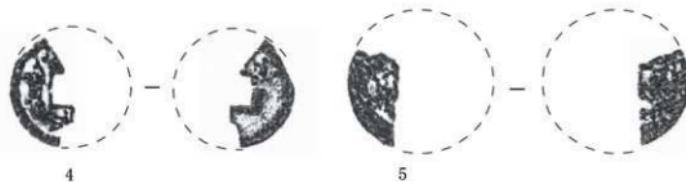


1



O D

3



4

5



第22図(図版17) 玉類:小玉 金属製品:簪・錢貨

第VII章　まとめ

前章までに、今回の調査成果について述べた。第I章でも述べたとおり、調査の契機は、那覇市首里金城町3丁目地内における個人住宅建築に伴うものであった。ここでは、今一度その成果を踏まえてまとめたい。

沖縄県那覇市首里金城町は、世界遺産「首里城」「園比屋武御嶽」「玉陵」が所在する首里台地の南側斜面に位置し、その南下には安里川（金城川）が流れる。沖縄県指定史跡・名勝「首里金城町石畳道」が有数の観光地として知られる風光明媚な佇まいの地域である。

今回の調査区は、18世紀初頭に描かれたとされる『首里古地図』の「内金城村」に位置する。内金城村は、土族等の屋敷と考えられる表記や（内金城）御嶽・寺院などが所在する。

那覇市教育委員会等（那覇市、沖縄県立埋蔵文化財センター）による過去の発掘調査の成果としては、本調査12件が実施され報告されている（第4図参照 10件の報告書）。その他、公共・民間・個人等の開発に伴う試掘調査や現在調査継続中（資料整理中）などの調査区が幾つか存在する。

今回の調査では、層序を大きく四枚に大別した（第11図）。現代の造成土である表土層と最下層の地山（赤土：島尻マージ）との間に遺物包含層が堆積する。暗褐色及び黒色を呈する土層を第①層として本遺跡の遺物包含層とした。層厚20cm程度で、出土遺物は、中国産青花・青磁等から近代遺物までが層序内で一括して得られる傾向にあった。なお、その上部に薄く堆積し、色調がやや明るい層序を第①層上部として分層した。

今回の調査で確認された遺構は、ピット・溝状遺構・耕具痕（鋸跡・耕作痕）・礫集中遺構であった（第12図 図版6～9）。標高約67m付近で遺構が確認されている。調査区の北東側（標高約67.3m）から南西側（標高約67.0m）にかけて、やや傾斜する。その地形に沿って延びる溝状遺構の縁辺部に耕具痕が集中し、ピットが散在する。やや離れて礫集中遺構が位置する。確認された遺構については、住宅基礎の下に保存されることとなった。

出土遺物は、全体的に小片で得られており、攪乱が著しいことを示すものと見られた。確認された遺構と合わせて、本調査区の性格の一端を示すものと考えられる。

中国産陶磁器は、青花を中心に褐釉陶器、青磁、白磁等が得られている。青花は、17～19世紀代の資料が多くを占めるものと見られる。褐釉陶器及び青磁の多くは、15・16世紀代の資料であろう。

本土産陶磁器は、クロム青磁・型紙刷りなどの近代産が多くを占めた。その中で、第15図3・4に記されている銘は、本居宣長の「しき嶋のやまとごゝろを人とはゞ朝日にトほふ山ざくら花」（敷島の歌）であろう。その他、近世期の肥前磁器を染付として集計した（7点）。また、陶器として集計した資料の中には、薩摩焼と見られるものもある。

沖縄産陶器の瓦質土器として第20図に示したものは、残存の形状などから「馬蹄形焜炉」の可能性が考えられる。類似資料として、首里城跡や天界寺跡で出土している。

第22図1に示した小玉は、石製と見られるが具体的な材質の同定は行っていない。1点のみの出土であり、注意される。

今回の調査成果（生産遺跡を示唆する遺構の確認と18世紀前後を示す遺物出土状況）と文献資料（第8～10図の首里古地図・第7図の戦前の金城町民俗地図）等に基づき、調査区の性格を推測すると、

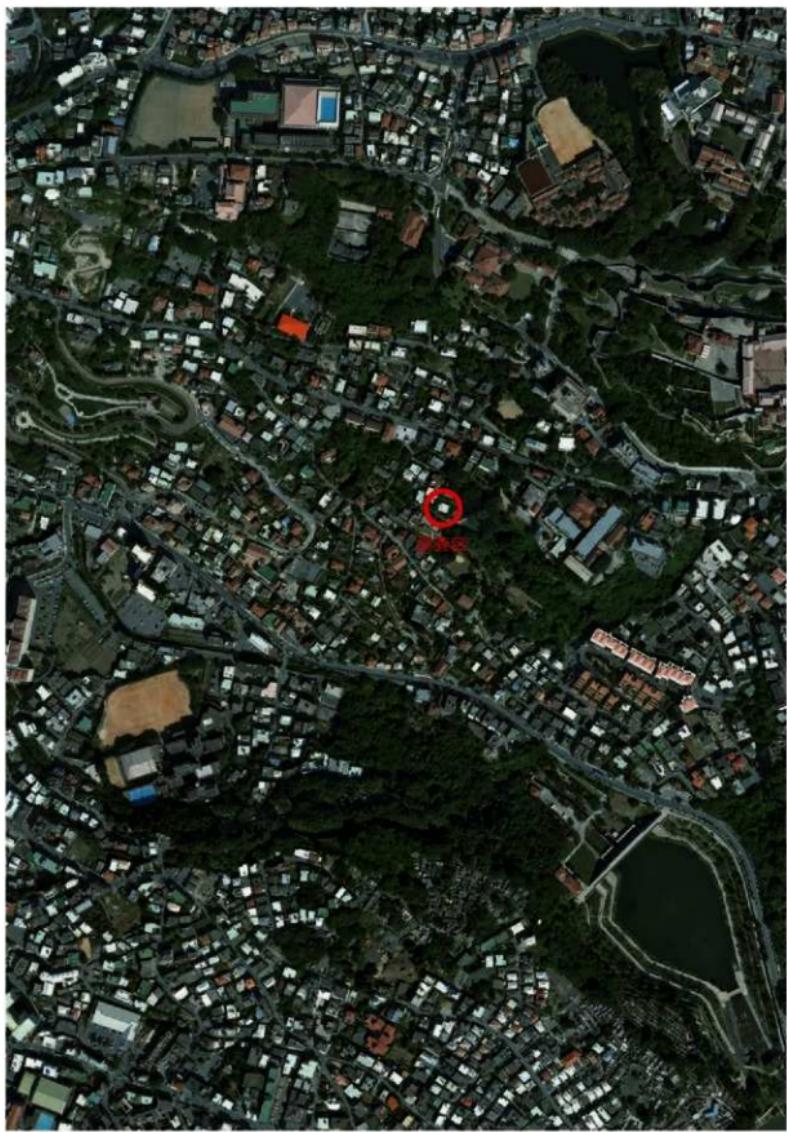
「近代以降の生産（畑）の場」や「琉球王国時代に任命された高あむしられの屋敷跡及び畠地」などの解釈が想起される。これらのことから、琉球王府時代に成立した『首里古地图』に記された「高あむしられ」の屋敷跡が、近代になって廃絶し、敷地全体が畠地となり、現在の住宅地として変遷していく過程がうかがえる。これまで実施された周辺の発掘調査成果として、隣接する北側の調査区（主要な出土遺物から少なくとも 16 世紀を想定）では、「地山が北側へ傾斜し落ちこんで深くなっていく」という状況は不明であるが、土坑などの構造あるいは自然流路が存在している可能性」や「遺物包含層である第 6 ~ 8 層の堆積でもってほぼ水平となっており、これに付随してピット 1・2 が作られている。このことから、地山を第 7 層土で造成あるいは造成の過程でフラットに整地しそこへ柱を伴う何らかの構造物を作った」と推測している（参考文献 9）。さらに、南側に隣接する調査区では、「内金城城道となる石疊道は、18 世紀末から 19 世紀末までの約百年の間に敷設されたものと、ここでは想定しておきたい」との報告がなされている（参考文献 8）。本調査区を解釈する上で貴重な参考資料である。

最後に、これまでに実施された各調査区の調査成果を踏まえ、それらを面的に考察し、文献資料と合わせて遺跡の立地・確認構造・出土遺物の在り方を捉え直すことにより、「首里旧金城村跡」の総合的な解釈の一端を提言していくことが重要である。今後、改めて各調査区における成果について整理をしていきたい。

【参考文献（1~10は第4図対応）】

1. 那覇市文化財調査報告書 第 46 集 『首里旧金城村跡』 那覇市教育委員会 2000 年 3 月
2. 那覇市文化財調査報告書 第 48 集 『首里旧金城村跡』 那覇市教育委員会 2001 年 3 月
3. 那覇市文化財調査報告書 第 68 集 『首里旧真和志村跡（首里旧真和志村跡・首里旧金城村跡）』 那覇市教育委員会 2005 年 3 月
4. 『首里旧金城村跡』那覇市教育委員会 2007 年 5 月
5. 那覇市文化財調査報告書 第 81 集 『首里旧金城村跡』 那覇市教育委員会 2010 年 3 月
6. 那覇市文化財調査報告書 第 80 集 『那覇市内遺跡Ⅱ－首里金城村跡－』 那覇市教育委員会 2009 年 3 月
7. 那覇市文化財調査報告書 第 82 集 『那覇市内遺跡Ⅲ－首里旧金城村跡－／首里旧真和志村跡－』 那覇市教育委員会 2010 年 3 月
8. 那覇市文化財調査報告書 第 79 集 『首里内金城村跡石罫道』 那覇市教育委員会 2009（平成 21）年 2 月
9. 那覇市文化財調査報告書 第 106 集 『那覇市内遺跡Ⅳ－首里旧金城村跡－／御茶屋御殿跡－』 那覇市 2018（平成 30）年 2 月
10. 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 26 集 『ナカンダカリヤマの古墓群』 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005（平成 17）年 3 月
- ・沖縄考古学会 2018（平成 30）年度研究発表会資料集 『古都首里を掘る』 沖縄考古学会 2018（平成 30）年 7 月 8 日
- ・公益財團法人鈴屋遺蹟保存会 本居宣長記念館のホームページによると、「しき嶺のやまとごゝろを人とはゞ朝日にゝほふ山ざくら花」は、「日本人である私の心とは、朝日に照り輝く山桜の美しさを知る。その麗しさに感動する、そのような心です。」と紹介されている。
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 2 集 『天界寺跡（1）』 沖縄県立埋蔵文化財センター 平成 13（2001）年 3 月
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 77 集 『首里城跡－銭蔵地区発掘調査報告書－』 沖縄県立埋蔵文化財センター 平成 27（2015）年 3 月

図 版



図版 1 遺跡一帯の空中写真（2009 年撮影）



図版2 調査区の遠景と近隣（首里金城町石畠道）の状況

- 1段目左：遠景（南側から）
- 2段目左：石畠道（北側から）
- 3段目左：石畠道（北側から）
- 4段目左：近隣の状況（西側から）

- 1段目右：遠景（南側から）
- 2段目右：石畠道（北側から）
- 3段目右：石畠道（南側から）
- 4段目右：近隣の状況（東側から）



図版3 表土剥ぎ作業の状況

1段目左：作業状況

2段目左：作業状況

3段目左：作業完了

4段目左：作業完了

1段目右：作業状況

2段目右：作業状況

3段目右：作業完了

4段目右：作業完了



図版 4 調査状況と調査区全景

1段目左：発掘調査状況

2段目左：調査区全景（西側から）

3段目左：調査区全景（東側から）

4段目左：埋戻作業状況

1段目右：発掘調査状況

2段目右：調査区全景（南側から）

3段目右：調査区全景（北側から）

4段目右：埋戻作業状況



図版5 図面作成作業状況

- 1段目左：調査区平面図作成作業状況
- 2段目左：層序図作成作業状況
- 3段目左：遺構平面図作成作業状況
- 4段目左：遺構平面図作成作業状況

- 1段目右：調査区平面図作成作業状況
- 2段目右：層序図作成作業状況
- 3段目右：遺構平面図作成作業状況
- 4段目右：遺構断面図作成作業状況



図版6 K-9・10 グリッド

1段目左：グリッド全景（東側から）

2段目左：遺構検出状況（北側から）

3段目左：Pit 5 半裁状況（北側から）

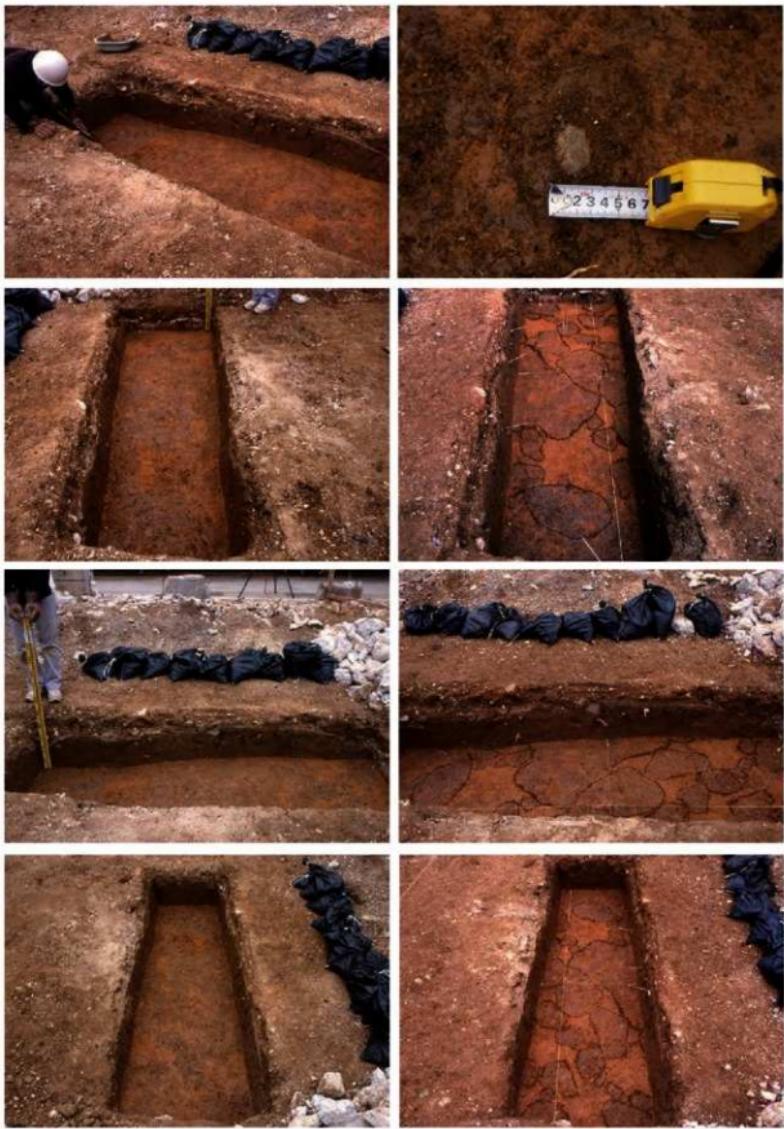
4段目左：層序と礫集中遺構半裁状況
（北側から）

1段目右：遺物出土状況

2段目右：層序と Pit 5 半裁状況（北側から）

3段目右：礫集中遺構半裁状況（東側から）

4段目右：礫集中遺構半裁状況（東側から）



図版7 K-11 グリッド

1段目左：精査作業状況（南側から）

2段目左：遺構検出状況（西側から）

3段目左：層序と遺構検出状況（南側から）

4段目左：遺構検出状況（東側から）

1段目右：遺物出土状況

2段目右：遺構検出状況（西側から）

3段目右：層序と遺構検出状況（南側から）

4段目右：遺構検出状況（東側から）



図版8 L-9・10グリッド

1段目左：グリッド全景（北側から）

2段目左：層序（西側から）

3段目左:Pit 6 検出状況（西側から）

4段目左:Pit 1・2 半裁状況（南西側から）

1段目右：グリッド全景（西側から）

2段目右：層序（北側）

3段目右:Pit 6 半裁状況（北側から）

4段目右：遺構検出状況（西側から）



図版9 L-11 グリッド

- 1段目左：層序と遺構検出状況（北側から） 1段目右：層序と遺構検出状況（南側から）
2段目左：層序と遺構検出状況（東側から） 2段目右：層序と遺構検出状況（西側から）
3段目左：遺構検出状況（北側から） 3段目右：層序と遺構検出状況（南側から）
4段目左：遺構検出状況（東側から） 4段目右：遺構検出状況（西側から）



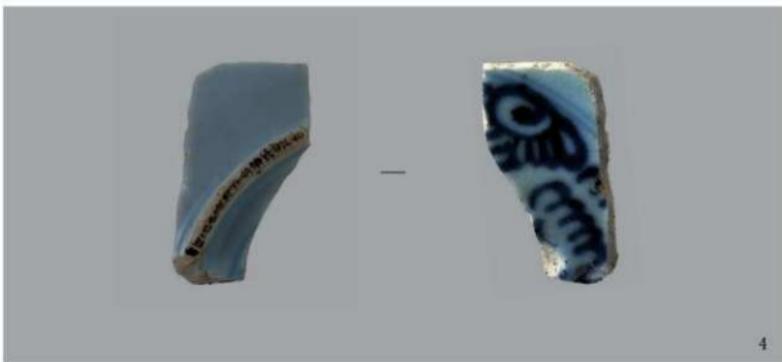
1



2



3



4

図版 10 (第14図) 中国産青花: 碗・小碗・皿



図版11(第15図) 本土産磁器: 小碗・碗
本土産染付: 碗
本土産白磁: 盤



1



2



3

図版12（第16図） 本土産陶器：壺・急須



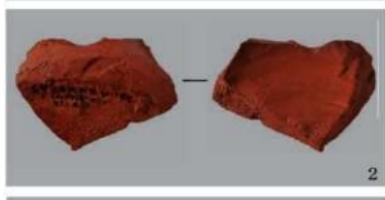
図版13(第17図) 沖縄産施釉陶器: 碗・急須・壺・火炉



図版14(第18図) 沖縄産無釉陶器①:鉢・擂鉢



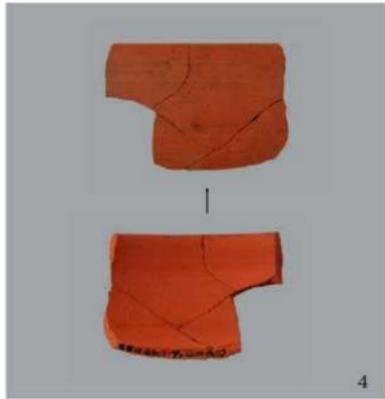
1



2



3



4



|



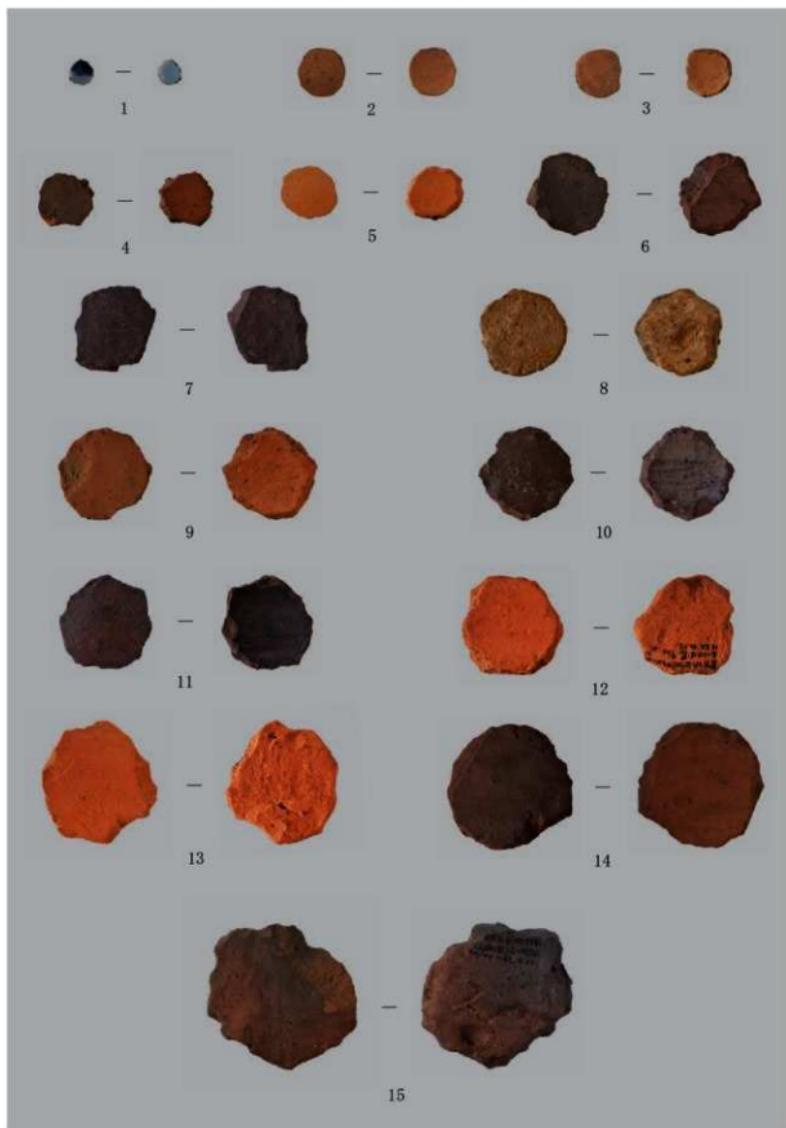
|



5

図版15(第19図) 沖縄産無釉陶器②: 壺・甕 陶質土器:鉢

(第20図) 瓦質土器:炉



図版16(第21図) 円盤状製品



圖版17(第22圖) 玉類：小玉 金屬製品：簪・錢貨

報告書抄録

ふりがな 書名	なほしないよし 那覇市内遺跡							
副書名	首里旧金城村跡							
卷次								
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第110集							
編著者名	仲宗根啓							
編集機関	那覇市 文化財課							
所在地	〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎1-1-1 Tel098-917-3501							
発行年月日	西暦 2019年 3月 22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ○分○秒	調査期間	調査面積	調査原因	
なほしないよし 那覇市内遺跡Ⅷ 首里金城町	おきなわけん 沖縄県 なほし 那覇市 しゅりきじょう	47201		26度 12分 56秒 (世界測地系) (第XV系)	127度 42分 57秒 (世界測地系) (第XV系)	20100412 ～ 20100423	約48m ²	個人住宅 建築
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
那覇市内遺跡Ⅷ	集落跡	グスク時代 ～ 沖縄近世・近代		ピット群 溝状遺構 耕具痕 礫集中遺構		青花 本土産陶磁器 沖縄産陶器 円盤状製品 玉類 簪 錢貨	生産遺跡に 関連すると考 えられる耕具 痕等の検出	
要約	今回の調査は、個人住宅建築に伴う「首里旧金城村跡」の緊急発掘調査である。調査によって、生産遺跡に関連すると考えられる耕具痕・溝状遺構・礫集中遺構やピットなどが確認されたことは貴重な成果となった。遺物包含層として捉えた第①層から、中国産青花、本土産陶磁器、沖縄産陶器、円盤状製品、簪、玉類、錢貨など多種多様な遺物が得られている。なお、今回の調査区においては、住宅建築前の調整によって、地山直上に確認された遺構が保存できた。							

那覇市文化財調査報告書第 110 集

那覇市内遺跡VII

—首里旧金城村跡—

発行 2019（平成 31）年 3 月 22 日

那覇市

〒900-8585 沖縄県那覇市泉崎 1-1-1

編集 那覇市 市民文化部 文化財課

TEL 098-917-3501

FAX 098-917-3523

印刷 有限会社 アイドマ印刷

〒902-0073 沖縄県那覇市宇上間 244 (3F)

TEL 098-833-1122
